

烈風の魔札使と召喚戦争

1

森田季節
イラスト クロサワテツ



召喚戦争

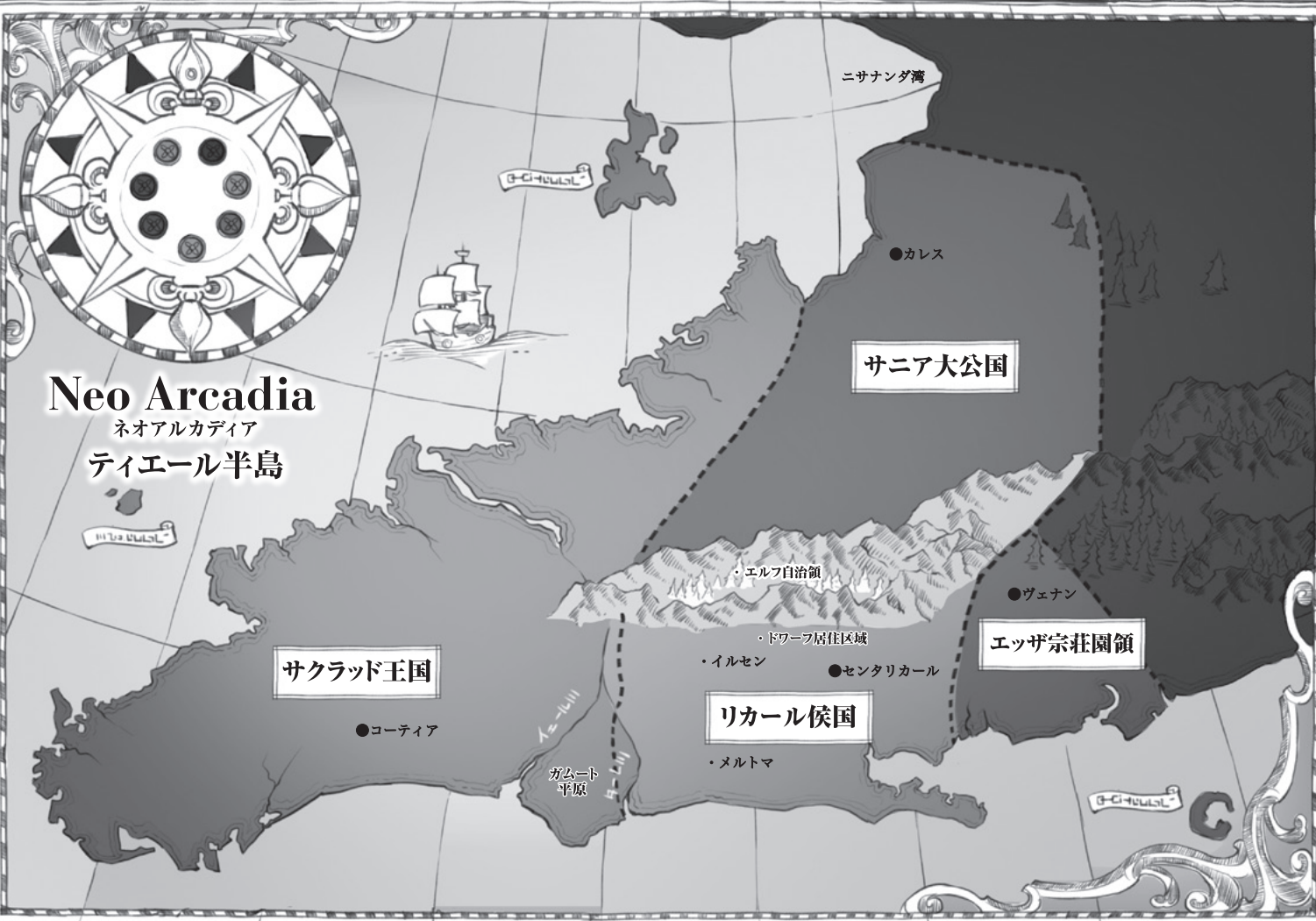
1

森田季節
イラスト クロサワテツ



烈風の魔札使と

OVERLAP



Neo Arcadia

ネオアルカディア

テイエール半島

サクラッド王国

●コーティア

ガムート平原

リカール侯国

・メルトマ

・エルフ自治領

・下ワーフ居住区域

・イルセン

●セントリカール

エツザ宗荘園領

●ヴェナン

サニア大公国

●カレス

ニサナンダ湾

魔札使の入門書

A introduction of marje



【カードの属性と特徴】

ネオアルカディアのカードは、それぞれ特徴が異なる8つの属性に分類することができる。また属性は、それを象徴する固有色を持っている。

白 天界の属性

この世界の真理そのものが具現化した属性。天使・天人などの召喚霊に多くみられる。

青 広海の属性

あまりに広く、あまりに深い海の属性。海洋生物の召喚霊に多くみられる。

紫 精神の属性

ネオアルカディアの様々な概念を非^{ひこみ}ぶ属性。実体を持たないような召喚霊に多くみられる。

赤 大地の属性

大自然の強さと恐ろしさを体現する属性。野生動物やドラゴン、オーク、オーガ、ゴブリンなどの召喚霊に多くみられる。

黄 加護の属性

絶対者から人間に与えられた恩寵^{おんちゆう}を示す属性。一般の兵士や市民の召喚霊に多くみられる。

緑 生命の属性

世界中に根付いている木々の力を表す属性。植物や一部の昆虫の召喚霊に多くみられる。

黒 邪悪の属性

憎悪などの負の感情が元となる属性。闇から生まれたような召喚霊に多くみられる。

灰 人造の属性

人為的に造られた属性。魔力さえ豊富であれば、どの属性の魔札使^{マジ}でも使用することが可能である。

【カードの種類】

カードには大きく分けて6つの種類があると考えられている。この6種を組み合わせてデッキを構築するところから、戦略がはじまると言える。

1. エナジーボトル

魔力を生み出す根幹となるボトル。ボトルとあるが、容器の形状は様々である。また、どの属性の要素も含まない透明なエナジーボトルもある。

2. 召喚霊

魔札使が召喚するカードバトル内だけの擬似生物。敵を攻め、我が身を守るのに必要である。膨大な種類のものが存在する。

3. 結界

戦闘中の空間にとどまり、カードバトル全体に影響を及ぼすカード。敵だけ、味方だけに影響するような効果の狭いものと、その場のすべての魔札使と召喚霊に影響する大がかりなものに分けられる。

4. 憑依物

召喚霊やエナジーボトル、稀に結界に付着して、その力を高めたり、異常を起こさせたりするカード。

5. 易術

比較的少ない魔力で、常時使用が可能な一回で使いきりのカード。相手の行動を阻害するものもここに含まれる。(精神の属性)に数が多い。

6. 大術

大がかりな効果を発揮する一方で、一定の精神集中時間を必要とするため、相手に対応するような使い方ができないカード。(大地の属性)などに数が多い。

Turn 1

魔法使いからの手紙

かつて、その世界はアルカディアと呼ばれていた。

「樂園」を意味する、美しい響きを持った言葉で。

だが、皮肉なことに、国同士の諍^{いさか}いが重なり、世界は果てのない戦乱に陥った。

このままではアルカディアが滅ぶ^{いさか}。造物主である神は憂えた。

そこで、神は戦うことを生業^{なり}とする者と、そうでない者を二つに分けることにした。

一部の者のみにすべてを確^たき払うほどの力を与え、ほかの者からは一切の力を奪った。

その力の権化^{ごんげ}たちを——魔導師と呼ぶ。

彼らは、火山のような火の玉を作り、塔より高い竜を呼び出した。

戦争は魔導師たちが行うものになり、

歴史は魔導師たちが紡ぐものになる。

もはやアルカディアは変質したと感じた人々は、世界をこう呼び変えた。

——ネオアルカディア。

魔導師がすべてを決定する力を持つ世界。

◆ ◆ ◆
この「ゲーム」はそんな魔導師たちの戦争を再現したものである。

◆ ◆ ◆
「ま、まいった……」

上級生ががくりと頭を下げる。

「はい、ありがとうございます」

合わせてエイジも軽く頭を下げる。

ただ、礼儀をわきまえていようと、その眼光は鋭い。勝負を繰り返してきた者の目だ。

高校生でもスポーツのプロの世界で生きている者は、大人びた顔をしているものだが、それ

れにどこか似ていた。

その日、放課後三戦目の勝負を鷹津エイジは六ターンで済ませた。

「やっぱり、全国67位は伊達^だじゃないな……」

「それほどでも、ありますかね」

また、人間に従わない猫のような目でエイジは笑う。

国内だけでも二百万人のユーザーがいるカードバトル。

毎年千種類を超えるカードが追加され、現在、使用できる枚数は一万種を超える。

専用の対戦スペースは地方都市でもないところはない。

大会の賞金で生活しているプロが存在するほど。

制作元の会社は業界最大の利益を三年連続で上げていた。

そのカードの名は『ネオアルカディア』。

鷹津エイジはその中でワールドランキング67位を勝ち得ている。

高校生が二桁ふたけたプレイヤーになること自体、奇跡的だ。おかげで、他学年からも勝負を挑む命知らずがあとを絶たない。

「では、勉強頑張って下さいね、先輩」

「ああ、少しでもトッププレイヤーに近づけるようにするよ」

「いえ、大学受験の勉強のことですよ」

招かれた遠征に全勝したエイジは三年生の教室をあとにした。

エイジのデッキはフォーターンキルと呼ばれている。

名前の通り、最速四ターンで敵のライフを削りとれるからだ。

『ネオアルカディア』のデッキでも、最も攻撃的なものの一つだ。

これでランキングの67位まで上った。ただし、あぐらをかいている余裕はない。

デッキは生き物だ。

当日のカードバランスが少しでも違えば、デッキは機能不全に陥る。

だから、次の大会に向けて、ひたすらチューニングを続けるしかない。それが終われば、またその先の大会のために、チューニングする。終わりはない。気を抜いたところで、ランキングはすぐに三桁に逆戻りするだろう。

「どうするかな……二枚だけ差し替えるかな……」

独り言をつぶやきながら、放課後の廊下を歩く。頭の中は『ネオアルカディア』で埋まっている。

目指すは自分のクラス、二年一組。カバンを取りに戻らないといけない。

——と、エイジの教室から出てくる影があった。

話したことはないが、その顔を見てすぐに誰かたれわかった。なにせ、相手は有名人だ。
とよはるせりか
 豊春片香。

才媛で知られる三年生の女子だ。

エイジが『ネオアルカディア』の67位なら、向こうは全国模試の36位。

かといって、勉強一筋というわけでもなく、人付き合いもいらしい。自然と周囲には女子のサロンができていてという噂だ。

見事なのは学業だけではない。長い黒髪は放課後になっても艶つやを保っている。女子にしては背の高いほうなのに威圧感はない。むしろ、すべてを包みこんでしまうような、物腰

のやわらかさと優美さがあった。それを母性的という言葉で言い換えてもいいかもしれない。

けれど、そんなプロフィールでは解けない謎がある。
(どうして、俺のクラスに……?)

足が止まりそうになるエイジのそばを豊春片香は通り過ぎていく。

二人の影が重なる瞬間――

彼女が意味深な微笑を浮かべたように見えた。

思わず、振り返ってしまった。

そんなエイジに気づくふうもなく、その上級生は階段を降りていくだけだ。

「気にしすぎだな……。とっとと帰るか」

エイジと彼女との間に何の接点もないのだ。

だが、エイジの机には一通の封筒が置いてあった。

宛名は「鷹津エイジ様」となっている。文字からして女性のものである。

一瞬、恋文かと思ってしまうが、それにしては封筒が無骨すぎる。

しかも、封筒には見慣れたロゴが印刷されていた。

『ネオアルカディア』のロゴ。それと販売元の『Octel』のロゴ。

楽しみに家までとっておけるものじゃない。



その場ですぐに封を開けて、中の便箋を取り出す。

鷹津エイジ様

貴方とぜひ雌雄を決したいと思っております。

今度の日曜日の午後二時、別添の地図の場所までお越し下さい。
いらっしやらない場合は逃げたものとみなしますので。

MOTHER 豊春芹香

そこに書かれていた、見覚えのある六文字に、ぞくりと寒気がした。

すぐに携帯で、『ネオアルカディア』のワールドランキングを確認する。

ランキングにクレジットされる名前は本名でもハンドルネームでもいい。ただし、上位陣は本名を出すことのほうが多い。エイジもそちらの側だし、だからこそ高校で対戦を申しこまれることも多かった。

すぐにMOTHERの文字は見つかった。

なにせ、全国9位の欄にあるのだから。

大会のレポートを見ていれば何度も目にしていて。

いつも写真がないので女性だろうとは言われていたが、それで正解らしい。

封筒の中の地図は都内の新宿駅前のものだった。

エイジの最寄り駅からなら電車で三十分も乗れば着く。

「高校一強くなるのすら大変だな」

すぐにエイジは教室を出る。

時間ももつたない。

歩きながら、勝利を上げたばかりのデッキを、あらためてざっと見直す。

「徹底的に調整しないとな」



六月の新宿は風の通りも悪く、雨のあとでもないのに空気が湿っていた。

交差点の前で立っていると、人の流れの邪魔になるので、ビルの壁にもたれかかる。車
が通るたびに、壁が鏡のようにその姿を映し出している。

エイジは待ち合わせ時刻の二十分前に来た。服装はエイジなりの礼装にしている。T
シャツを重ね着した上に柄の入った派手なジャケット、ジーンズはかなり値の張るデッド
ストック物だ。靴はほどよい艶を帯びたレザーースニーカー。

「よし、まだ来てないな」

招待してきたのは向こうだ。ぎりぎりに着いたのでは、敵のペースに巻きこまれる。デッキは有限だ。入れていないカードを山札から引くことはできない。強いデッキを組まなければ、勝利は手にできない。

それでも、プレイングによってデッキの強さは大きく左右される。

事実、流行のデッキスタイルは新しい拡張セットが出るごとに移り変わるが、上位陣の名前はそうそう変わらない。

つまり、勝負はプレイングの妙にある。

そのプレイングはプレイヤーの精神状態によって左右される。拮抗した実力のもとでは、心が乱れた側が不利になる。ならば、ゲストは心を落ち着けておかなければ話にならない。待ち合わせ時刻の五分前――

「お待たせしました。ずいぶんお早い到着ですね」

豊春芹香が姿を見せた。

制服の時の、お嬢様然とした雰囲気から一転、キャミソールの上にシャツを羽織った、活動的な姿だ。足元も丈の短いレギンスのせいで、白い足が少しのぞいている。

「早いですか？ デートならごく普通のことですよ、先輩」

「あら、そんなつもりで手紙を出したのではないのですが」

「すみません、美しい姿で勘違いしそうになってましたよ」

そばを通行人が横切っていく。おそらく、ありふれたカップルに見えただろう。

「まさか、あんな手紙をもらえるなんて思いませんでした」

「メールじゃ雰囲気が出ませんかね」

「……あれ、果たし状――ですよね？」

「ええ、そうです。私と決闘しましょう――おっと、青ですよ」

さっさと豊春芹香は道路を渡っていく。エイジもそれに続く。

「ああ、そうだ、67位おめでとございます。こんな近くに二桁のプレイヤーがいるとは思いませんでした」

「俺も近くに一桁の人がいるとは思いませんでしたよ、豊春先輩」

「あっ、芹香と呼んでいただけませんか。その苗字、あまり好きではないんです」

「ますます、本当のデートみたいじゃないですか」

「勘違いされても、責任は負いませんよ」

エイジの胸は高鳴っている。体中が高揚している。

もちろん、デート気分だからじゃない。

自分のはるか先を歩く相手と戦えるからだ。

「わかりました、名前と呼びますよ、芹香先輩。――これでいいですか？」

「ありがとうございます、エイジ君」

「せりか 芹香はエイジを一瞥し、すぐに視線を前のほうに向けた。
「長々とお話をするまでもありませんでしたね。着きましたよ」

「シャープな四角錐の形をしたビルがそびえている。」

「二十一世紀型のピラミッドみたいだ。近代的なのに、どこか呪術めいた雰囲気もある。
「決闘に、ここ以上にふさわしい場所というのはないと思いませんか」

「エイジもそのビルを見上げて、そこがどこかわかった。」

「オクテット 『Octel』本社ビル——『ネオアルカディア』を作った株式会社だ。」

「四十八階まであるこのビルすべてが『Octel』の所有物だ。扱うのは無論、『ネオアルカディア』だけでない。ボードゲーム、携帯ゲームからオンラインゲームまで、ゲームと名前がつくものなら、あらゆるものに手を出している。」

「すでに会社にも話は通していますから」

「芹香は正面の自動ドアから慣れた様子で中に入っていく。」

「受付の女性は芹香を見とめると、すぐに立ち上がって、頭を下げた。取引会社の社長が来て、こんな態度にはならないだろうというほどに丁寧だ。いや、丁寧というよりは、腫れ物に触るような扱いに近い。」

「案内されたのは、警備員の奥にあるエレベーターだった。」

「このエレベーターでないと四十階以上には行けないんですよ」

「芹香は最上階——四十八階のボタンを押す。」

「これが9位の特権ですか」

「10位までのプレイヤーは最上階の専用コロセウムを使えるんです」

「ありふれたことのように芹香は言う。」

「もっとも、普段は使いませんがね。来るのが面倒ですし」

「いいシステムですね」

「そうですね？」

「だって、そんな特権を得られたなら、そこから落ちまいと必死になるじゃないですか。それが上位陣のレベルの底上げになる」

「面白い考察ですが、それは間違いですよ、エイジ君」

「芹香が否定する。目は、速いペースで数字を更新していく階数表示に向けられていた。
エレベーターは怖いぐらいに加速している。」

「自分のランキングの死守に汲々としていたような人ならここまで来れませんよ。1位の人なら知りませんが、ほかはもっと上を目指すことしか考えていませんね」

「そうか、これは戦国時代と同じなんですね」

「何がですか？ 『ネオアルカディア』の世界観がですか？」

「いえ。天下を取ろうとする者しか天下は取れないということです」

戦国の動乱が群雄割拠の時代だというのは正しい。だが、誰もが天下の覇者を目指したというのは誤りだ。

「戦国時代、大半の領主は土地を守ることを考えていました。それが武士の価値観からです。所領を広げるといっても周辺の土地をただだければ上等というところでしょう。その中で信長と跡を継いだ者だけが常識はずれだったんです」

「エイジ君は歴史がお好きなんですね」

「時代は限定されませうけどね。だって、興味深いじゃないですか。自分の『運命』を切り開くために、本当に『命』を懸けないといけない時代があったんですよ」

もちろん、当時だって大半の人間は目的を『守る』ことに置いた。『奪う』ために突き進んだ信長の、部下の裏切りによる最期は客観的に見て幸せなものではない。

しかし、今持っている物を守ろうとするだけでは上には進めない。そして、芹香はさらなる高みを当然のように目指している。

（今、尊敬する人物は？ と聞かれたら先輩の名前を出しちゃうな）
期待がもう、はち切れそうだ。

（早く、やりたい）

そして、こうも思った。

（――必ず、ここまでたどりついてみせる）

「エイジ君、見た目によらず、血は熱いですね。顔を見ればわかりますよ」

「熱くなるとしたら、9位の人が出てきたせいでしょうね」

エレベーターを降りて、二人はホールのような一室に入る。

真っ白い殺風景な部屋の中央に、台が向かい合って置かれていた。表面には薄いマットが敷いてあり、カードの設置場所を示すような線が引かれている。

〈幻像場〉——この上でカードを展開すると、磁気情報を読み取り、立体映像をその場に出現させる。プレイヤーは実際に魔法を使っているような気分になれるというわけだ。

対戦スペースのあるゲームシヨップに置かれていることはあるが——それ専用の部屋が用意されているなんて、まずありえない。

「簡素な部屋でしょう？ けれど、ギャラリーの視線を浴びるよりはいいですよね」

芹香は〈幻像場〉にデッキをセットする。

その途端、照明が消え、部屋全体にギリシヤの神殿を思わせる映像が映る。

神殿は吹き抜けになっていて、端正な柱のはるか向こうには都市の街並みが見渡せた。この神殿は丘の上にあるという設定なのだろう。

「〈幻像場〉に背景の設定なんてありましたっけ？」

「この部屋の〈幻像場〉は特別なんです。これも特権の一つなんですかね」

「特権のおこぼれにあずかされて光栄ですよ。はじめましょうか。先攻は——」

「こっちが場所を指定したんですから、エイジ君がどうぞ」
 「その発言、後悔するかもしれませんよ」

野球は後攻が有利と言われるが、『ネオアルカディア』の場合はその逆だ。表のあとに裏の攻撃があるとは限らない。どちらかのライフが0になれば即座に試合終了だ。攻撃のチャンスが多くなわってくる先攻をとるにこしたことはない。

まして、エイジのフォーターンキルは、極端なほど速攻に特化したデッキだ。「俺は先輩から見たら試される側ですが、そこまで弱くはないですよ」

「心配なく。弱い人なら試そうとも思いませんから」
 もう、不遜な物言いはいい。

カードで決着をつければいい。

エイジは山札の上から最初の七枚をとる。悪くはない引きだ。

【大地のエナジーボトル】を一つセット」

最初にまず定石通り、エナジーカードを出す。これは呪文ではなく、呪文を使うための魔力を生み出すものだ。

これを起動し、【アフィリアの山猫】を召喚。

エイジのそばに虎のようなサイズの猫が姿を現す。

一方、芹香は――

「精神のエナジーボトル」を一つセットして、おしまいです」
 あっさりターンを終える。
 (やはり、その手のデッキか)

彼女が大会で上位に入ったデッキレシピは公式サイトで公開されている。それはトップランカーの義務だ。名前はハンドルネームでもいいが、デッキの非公開は許されない。一般的に、敵を封じこめることに主眼を置いたスロースタートのものが多い。
 (タイプからいくと、俺と真逆か)

山猫の大きな牙が芹香に噛みつく。
 実体はないから血は出ないが、噛まれる側は楽しくはないはずだ。

「それから、【大地のエナジーボトル】をもう一枚出して、【樞のトロール】召喚」
 ペースは悪くない。

三体ほど〔召喚霊〕を出して数で圧倒すれば、押し切れる。

だが――

「そのトロールに対して、【魔法漏洩】を使います」

トロールは姿を現す前に突風でかき消された。

「そんなものまで入っているって、マリシヤス・キーパーか」

日本語にすれば――悪意ある監視者。

大量の阻害カードで相手の呪文の発動自体を止めてしまうデッキだ。

「そうなりますかね。悪意なんてないから心外ですけど」

（出鼻をくじかれたが、やれるか？……………やれる！）

いくら向こうの阻害カードが多かろうと、せいぜい二十枚。

こちらは三十枚が〈召喚霊〉カードだ。

（きつと、すべては排除できないはず）

次のターン、エイジは【アフィリアの山猫】、さらに【毒爪の黒猫】を連続して召喚した。山猫のほうは、また阻害されたが――

「あとから出てきたほうは阻害できません。さすがお速いですね」

「それしかとりえないデッキなんですよ」

そこから先は同じような展開が続いた。

エイジは〈召喚霊〉の追加を試み――

―― 芹香は呪文で阻害する。

一見、場は停滞しているが、ライフのほうは常に変動している。

存在を許されたほうの山猫と途中参加の黒猫が毎ターン、芹香のライフを削る。

（マリシャス・キーパーの弱点は一度場に出たものを除外するのが苦手なこと）

46が41になり、36になり、31、26、21、16、11……。

（このまま押し通してくれっ！）

だが、敵はそこから動いた。

珍しく、芹香が自分のターンからエナジーボトルを起動する。

【密造精神弓】を出します」

「人造属性のカードか……」

人造属性は魔力の系統に関する制約がないので、どんなデッキにでも加えられる。

【密造精神弓】は手札を捨てて起動することで3点のダメージを発生させる。ただし使用してしまつと、自分のターンが再度来るまでは使えない。

「これしかダメージを与えるカードないんですよ、このデッキ」

存在を許してしまった〈召喚霊〉の掃除役で、かつ、敵をがんにじめにしたらあとに、緩慢になぶり殺すための唯一の武器だ。

すぐさま、黒猫のほう我倒された。

【密造精神弓】がフルに動けば、多くの〈召喚霊〉は射殺される。

かといって、〈召喚霊〉の出し惜しみをしてもエイジに勝機はない。

（間に合うか、間に合わないかの瀬戸際だな）

防御力が4以上の〈召喚霊〉カードをエイジは二枚しか入れていない。そのカードを引き、なおかつ、敵の妨害を避けられないと勝ちはないが――

エイジは慎重にカードを引く。この一枚でおそらく勝負は決まる。
 (神様は俺に微笑んでくれたな)

決定打を引いたことを悟られないように、表情は変えない。対戦相手は人間だ。顔色一つで布石を破壊されることだってある。

「山猫で攻撃します。【大地からの補充】でこのターンだけ攻撃力を4点強化！」

「合計6点ですか。残り5点です」

(通してきたな！)

芹香は危険な呪文だけを阻害すれば残りライフを守りきれると思っっているだろう。

けれど、エイジには切り札がある。

「それじゃ、このターンのエナジーカードを出しますね」

「【大地のエナジーポトル】も余ってきましたね。もう出しても無駄では？」

「いえ、それじゃないんです。【ドライブアドの結晶】」

エナジーカードとしては無属性の魔力しか出せない二流の道具だ。

もっとも、その能力には続きがある。大地の魔力を消費することでそのターンだけ攻撃

力・防御力ともに4点の〈召喚霊〉としても扱えるのだ。

重要なのがエナジーカードという点だ。

エナジーカードは呪文カードではない。

つまり、場に出ることを阻止できない。

(山猫は殺されるけど、精神弓でドライブアドは死なない。こいつで二度叩く)

エイジの思惑通りに場は動く。

山猫は殺されたが、ドライブアドが4点のダメージを与える。

「こちらは残り1点です」

(次のターンで勝てる！)

「私のターンですね。カードを一枚引いてと」

ゆっくりと【精神のエナジーポトル】を芹香は起動する。

「二枚目の【密造精神弓】です」

おどけたように、芹香はそのカードを場に出す。

【密造精神弓】は芹香唯一の攻撃手段。だとしたら、複数枚入れるのが基本だ。

最初から勝利は芹香の手元にあった。

それをかすめとれたかと思っただのはエイジの錯覚だった。

二枚の弓が生み出すダメージは6点。

それで死なない〈召喚霊〉はエイジにはない。

勝負はそこでついた。

【密造精神弓】がエイジを狙い続け――

ライフが0になる。

神殿の映像は消え、ただのからんどうの部屋に戻った。

「負けました。完敗です……」

「惜しかったですね。もっと調子がよければ、私のほうが負けていたかも」

「いえ、引きはよかったです。あそこで【ドライアドの結晶】を引いて勝てなかったのだから、どうしようもないです」

「ふふ、引きがよくもないのに、私に勝てると思っていたんですか？」

「いつか、逆転してやりませよ」

エイジは口を動かしながら、今の試合をシミュレーションしている。

プレイングをミスした部分はなかったか？ おそらく、ミスはなかったはずだ。思いつかない。それとも、自分の技量がまだ甘いからミスに気づけないのか？

視線は表に向けたデッキの中のカードに向いている。

「あら、早速、反省会ですか」

「だって、勝つためにゲームしているんですから」

しよせん 所詮、カードバトルはゲームにすぎない。

そこで偉くなろうと、ゲームの強者という架空の地位止まりだ。

だが、たとえ架空の地位といえども、手にしたくないわけがない。

人生のあらゆる局面で、どうせなら勝ちを目指さなければ、上を目指さなければ。

そうでなければ、面白くない。面白くない人生なら死んだほうがマシだ。

「まさにカードバトルのために生まれてきたような人ですね、エイジ君は」

手放して芹香は後輩を褒める。

それができるのは、彼女が後輩よりも強者であるからにほかならない。

「それじゃ、俺は失礼しますね」

ジャケットのポケットにデッキケースをしまう。エイジに部屋を占有する権利はない。

しかし、何か違和感がある。

けれど、それは薄い膜みたいな違和感だ。何がどう違うのか言語化できない。

「ああ、そうだ、大切なことを言い忘れていました——合格です」

「合格？」

「はい、今日お呼びしたのはエイジ君を試すためだったんです」

「二桁台の力にふさわしいかどうかをですか？」

「順位なんてつまらないことじゃありませんよ」

芹香は「つまらないこと」で切り捨てる。

「エイジ君から適性を強く感じとりました。これなら向こう側に招待するには十分ですね。上位陣だからといって、適性があるとは限らないので」

「向こう側？」

見慣れないカードを芹香は取り出す。

『ネオアルカディア』のカードではない。サイズがひとまわり大きいし、やけに重そうだ。そのカードを持つ手に少し芹香は力をこめる。

エイジの前の空間がゆらぐ。

「何だ？ 陽炎？（かげろふ）〈幻像場〉のエラーか？」

「実は私、魔札使なんです」

「マジ？」

「私は、この世界で言うところの魔法使いなんですよ」

彼女の目の前にもう一つ、小さな「陽炎」が現れる。平面のシャボン玉が出てきたように見える。

「少し見えづらいますが、これが私の出身地である並列世界とこの世界をつなぐゲート、なんです」

芹香の口調も表情も変化がないせいで、答えが読めない。

冗談なのか。

真実なのか。

「つまり、これをくぐると異世界に飛ぶと？」

「そのとおりです。今、並列世界はネオアルカディアと呼ばれています。昔はただのアルカディアでしたが」

——それはカードの世界観の設定そのものだ。

よく見ると、エイジや芹香の周囲を透明なアクリル板のようなものが囲んでいる。視界を奥にやると、途端にぼやけて見える。陽炎に見えたのは、これのせいか。

いや、物が置かれたのではない。内側と外側に何か「落差」が生まれたのだ。

二人の間だけが、外側と異なる時間の流れに放り出されたように。

「そんなネオアルカディアの方が何の用ですか？」

淡々と、エイジは受け答える。

どんな局面だろうと焦ったり取り乱したりしてはいけない。カードバトルと同じだ。情報の少ない不利な状況でこそ、自分を保たないと危険だ。

それに、冷静を装うことを意識すれば——本当に心は冷静になる。

「平静を失わない——さすがですね。どこまでも、私の期待を裏切りませんね」
いちいちエイジを褒めてから、芹香は質問に答える。

「スカウトですよ。ネオアルカディアで戦える英雄を探していたんです」

輪郭がくつきりと見えるのは、芹香と自分のいる狭い範囲だけだ。その先は、すべてがたゆたっている。

芹香がいる間は外に出ることすら許されないような、異様な情景だった。

「それで、ネオアルカディアにエイジ君をご招待したいなと思ひまして」

「三泊四日の観光旅行なら喜んでお受けしますけど」

「三日や四日では無理ですね。もしかすると何十年でも終わらないかも」

何十年——十七歳のエイジが実感を持っていないような時間だ。

「ネオアルカディアの歴史をかきまわしたくて、ハイレベルの魔法使いをこの世界で探していたんですよ。ちょうど似たゲームがいくつも流行ってしまいましたからね」

「似たゲームって、魔法使いがいる世界でテレビゲームがあったんですか？」

「カードバトルですよ」

芹香の前に、数枚のカードが浮かび上がる。

『ネオアルカディア』とは違うほうのカードだ。

「この世界のカードバトルとネオアルカディアのカードを使った戦いは極めてよく似ているんです。違うことといえば、こちらがただの遊びであること、ネオアルカディアでは戦争の道具としてカードを使っていることぐらいでしょうか」

カードが裏返り、エイジの側を向いた。

上部にイラスト、下部に何語かわからない文字が細かく綴られている。

「私は向こう側の知識を元にして、『ネオアルカディア』というそっくりのゲームを作っ

たんです。ゲームデザインとの交換条件として私は『Ochet』^{オケット}社員の娘という立場を得て、この世界にまぎれて、優秀な人材を探していたというわけです」

「優秀な人材に選んでいただいて、うれしいですよ」

「といっても、カードに強いただけじゃダメなんです。適性があるかどうかは別問題です。二桁までの人で、五人いればいいほうですか。エイジ君がその最初の一人ですね」

「何がそんなに良かったんですか？ 血液型はこの国にごまんといるA型ですよ」

「そうですね、カードにのめりこんでいる度合いですか？ いえ、のめりこんでいる人ならいくらでもいるんでしょうが、質的に少し違うんですよ。適性チェックも無事に終わっています。エイジ君の前に〈幻像場〉がありますよね」

特別製の〈幻像場〉は、見た目だけなら店舗にあるものと何も変わらない。

「それで数値でも測定できるんですか？ たしかに、形だけならフィットネスクラブにでもあります。エイジ君の前にもありませんよ」

「これ、電源入っていないんですよ」

「え？」

そんなバカな。目に映った〈召喚霊〉や背景は妄想だったというのか。いくら夢見がちな人間でも、あんなリアルな妄想は作り出せない。

「もちろん、私が魔法で支えていたわけですが、カードを実体化させたのはエイジ君の力

ですよ。才能がないなら何も出てきませんでした」

「俺は知らず知らず訓練用教材を扱っていたってわけですか」

エイジはカードと芹香の顔を交互に見た。

夢だと切つて捨てるには、すべてができすぎている。

「で、今から俺はネオアルカディアという異世界に連れていかれる、と」

「『連れていってあげてもいい』です。これでも人様の意見は大切にしますから」

ノンノンと芹香は人差し指を小さく振る。

「私は魔法の力で行き来ができますが、エイジ君の力だけでは一生戻ってこれないかもしれません。私も何も手助けしませんしね。むしろ、敵になることのほうが多いんじゃないですか？」

目を細めて、心から楽しそうに芹香は笑う。よこしまな気持ちなどまるで見えないほどに頬を上気させて。子供のように無垢な笑顔だ。

その表情にエイジは心当たりがあった。

心からゲームを楽しんでいる時に、人はこんな顔になる。

いや、まさに自分はこんな顔をすることがある。

そして——その芹香の表情に目を奪われていた。

「自分の故郷を歪ませて何をするんですか、先輩は？」

「そろそろネオアルカディアが収束しそうで、面白くないからですよ」

それから、こう付け加えた。

「混沌は少しでも長いほうが楽しいでしょう？ だから、エイジ君にかきまわしてほしいんですよ」

エイジとどこか似たような笑みで。

(この人、ちょっとおかしいな)

整い、落ち着いたものを許せない、破滅的な性格だ。

(でも、その気持ちはわかりますよ)

やはり、自分たちは同類なのだ。

「エイジ君には、氷雪部にあるメリアという国に向かっていただきましょうか。国土は広いですが大半は人が住めない氷山ですね。すぐに他国に攻められるリスクも少ないですが、のんびりしていると他国が覇権を握ってしまうかもしれないので、お早めに」

「別にそこまで教えてくれなくてもいいですけど」

「何も知らなければ誰も飛びこまないのでしょ？ その国の将軍としてエイジ君には戦っていただきます。もちろん将軍レベルの報酬は用意されますので、贅沢三昧に暮らしていただいてもかまいませんよ。あまり度が過ぎると追放されるかもしれません」

「向こう側で凄腕の助っ人になれつてことですね」

「それが嫌だというなら、高校生活に戻っていただければいいだけですよ。この記憶はすべて消してあげます。私も、もうしばらくは高校生の仮面をかぶります」

ゲートをくぐれば、戻ってこられない。

地球に、日本に、鷹津^{たかつ}家に。

エイジは思わず吹き出しそうになった。

——どうでもいい。

そんなものに価値は感じていない。

この世界の世渡りの方法なんてあらゆるところに情報が出回っている。

攻略サイト横目にゲームをクリアして何が楽しい？

「行きますよ、俺は」

「考える時間もとらずにいいんですか？」

即答に芹香が首をかしげる。

「先輩、遊び慣れたゲームと、新しいゲーム、どっちをやりたいですか？」

「後者と答えさせたいんですけど、慣れたゲームがいい人もいますよ」

「やっぱり、エイジ君は変わってますよ」

芹香がたゆたうゲートに手を入れる。

その奥に白銀の風景が映る。これがメリアという雪国なのだろう。

「入っていただければ、即座にメリアに着きま——」

その時——部屋が小さく揺れた。

「地震かっ!？」

いや、揺れたのは二人を包んでいる空間だけだ。

そして——

芹香の出したゲートの横に——別にゲートができていた。

最初のものに比べると、そちらはひとまわり小さい。

「えっ？ また一つ出てきましたけど？」

そのゲートにも異なった世界が映っている。

ただ、映っているのは、土地の遠景などではない。

一人の、異世界の、少女の姿。

ゴシック調の純白の儀礼服の上に、紋様付きの黒いローブをまとった姿は、どこか

シャーマンを思わせた。

けれど、今回の異世界の情報は映像だけではなかった。

「誰か！ この国を救って！」

声が——少女のものとおぼしき必死な声が地球にまで届いた。

「お願い……わたしたちだけじゃダメなの……。わたしたちを救って……」
 駆け引きも何もない。ただ、祈りにも似た叫びだけがあった。

「ネオアルカディアのどこかの国から偶然オファーが来たようですね。私がゲートを出したせいで、ここに引き寄せられたんでしょう」

芹香は涼しい顔をしている。

「ネオアルカディアのどこの国かはわかりませんか？」

「入って調べてみればわかるでしょうけど。今はネオアルカディア中が戦乱に巻きこまれていますから、異世界にも援軍を求めているのでしょう。気にしないで下さい。滅びそうな国も、滅んだ国も無数にありますよ」

「物騒なことですね」

「あなたの好きな戦国時代と同じですよ」

芹香が笑う。

エイジもつられて笑う。

「先輩、俺、もう行きますね」

「ありがとうございます、エイジく——」

エイジは出てきたばかりのゲートに手を伸ばす。

「どうしてそちらに入るんですか！ その先がどこか保証はできませんよ！」

「だからですよ」

エイジもさっきの芹香のように邪気のない顔で微笑む。

芹香はエイジを見て、顔を赤くした。

「最初から將軍の座が約束されているなんて、つまらないですから」

「命が懸かっているんですよ？」

「それなら、この世界を生きているのと同じですよ」

芹香はため息をついた。

だが、そのため息はすぐに新たな笑みに塗り替えられる。

「これはこれで面白いですね。どうせ乱れるなら、私もわからないような方法のほうがいいです」

「先輩、向こう側でまた戦えますか？」

「エイジ君の頑張り次第じゃないですかね」

「じゃあ、頑張るとしますかね」

「でも、この世界の9位を倒すよりははるかに難しいと思いますよ」

「そのほうが面白いです」

「せいぜい、死なないように遊んで下さい」

「はい、ゲームオーバーになったらつまらないですからね」

エイジはゲートに身を乗り出す。
水中に入ったような感覚が体を包む。

全身がその変化を知覚した時——ゲートの奥にいる少女と目が合った。

「あっ」

少女の声がとても近いところで、エイジの耳に聞こえた。

一気に距離が縮まった気がした。

「よろしくな」

そして、少女の手をつかんだ。

「来てっ！」

同時に、強い力でゲートの奥へ引っ張られる。

意識はそこで、ぼやけていく。

力がすっと抜けていくように。

「長旅になるのかな。それとも——」

最後にこうつぶやいた。

「一瞬で着くのかな」

Turn 2

ネオアルカディアへの召喚

白、青、紫、赤、黄、緑、黒。

床には七色のタイルがモザイク状に配列されている。古代宗教以来重んじられている、世界の七種の属性を表す色だ。

その上の低いテーブルには、銀製の小さな水瓶すいびょうが並ぶ。

中央の一本からは煙が伸びている。

風でなびくこともなく、まっすぐに立ち上る紫がかった煙。

その煙をテーブル前の少女はじっと見つめている。

純白の召喚学者の正装の上から責任者を示す漆黒のローブを羽織り、ひたすらに、ひた

むきに。

一つの体の中に、巫女みこと学者と少女性がせめぎあって、はじけるように美しい。もし、御用絵師がその光景を見ていたなら、必ず画題にしようとしたことだろう。

彼女は弱冠じやくわん十七歳で、召喚学のエキスパートとして知られていた。

儀式の外側では、国の重鎮みんが固唾かたずを呑んで見守っている。

この召喚が国の命運を決するからだ。
「物質側の調査は完璧ね。あとは——」

——意志のほうの問題だ。

召喚学は、れっきとした科学である。断じて魔法ではない。

だが、この科学はモノとココロの両方を必要とする。

モノの配分が完璧であろうと、召喚を行う者のココロに乱れがあれば、相手にアクセスすることはできない。

宗教で行われる精進と潔斎の技法にも、精神を集中させる似たような意味があるのだろう。その場合、アクセスするのは神とか形而上学的なものだろうが。

少女は必死に念じる。

悔しいが自分たちの力だけでは国は守れない。

英雄が要る。

理不尽で卑劣な敵を倒せるだけの力が要る。

煙の筋はだんだんと輪のようにふくらみ、歪んだ鏡のように異なる世界を映し出した。

異世界に通じたのだ。見守る観衆からも思わず声が漏れる。

道はつながった。

問題は——誰かがこの道を通ってくれるかどうか。

仮にゲートの外に救世主がいるとして、彼が自分の所属しない世界に興味を示すかはわからない。異なる世界を守る義理など何もない。

「誰か！ この国を救って！」

正統な召喚学では、声で気持ちを伝えるのは禁じられている。ココロが乱れば、ゲートそのものが閉じるからだ。

けれど、そんなことを言っている場合ではない。

想いを伝えなければ、手を貸してもらうことだってできない。

「お願い……わたしたちだけじゃダメなの……。わたしたちを救って……」

少女はゲートの中に手を伸ばす。

体もゲートに乗り出す。

手を握り合う感触。

「来てっ！」

思い切って、少女はその手を引っ張る。

同時に、その場を、叩きつけるような烈風が吹き抜けていく。

怒号のような風のどよめきは、雷鳴の轟きすら思わせた。

風は儀式用の水瓶も銀の鉢も種々の装飾品もすべて用済みとばかりに流し去っていく。

秩序を嘲笑う暴力の化身が駆けているようだった。

これまでに知っていた風とは異なる巨大な圧力が少女にかかる。
無論、その手を離すことなどないけれども。

「来てっ！ わたしたちのところにつ！」

そして、ゲートから、少女の召喚に応じた異世界の少年が現れた。
まるで、高貴な神格であるかのような、あふれんばかりの光とともに。
あまりに強い光に少女も思わず目を閉じた。



白い線。黒い線。

細い線。太い線。

視認も限界の今にも途絶えそうな線。

面という言葉のほうが適切であるような線。

そこには、ありとあらゆる線が引かれている。

線は、時たま思い出したように交わっている。交点は火花が散るように発光しているの
で、そのことがわかる。

その発光が怖いほどに強い箇所がある。



数えきれないほどの線が同時に一つの点で交わっているのだ。それは奇跡のようで奇跡ではない。なぜなら、線が無限にあるのなら、そんな点もまた存在するに違いないからだ。

その点にエイジは引き寄せられる。

引き寄せられてから、エイジは初めて自分の存在に気づく。

(あそこがゴール——というか、別世界なんだな)

人間が地球に存在するのが偶然を何重にも重ねた結果であるように、きっとその別世界も奇跡的な確率のもとに成り立っているのだ。

(光に引かれるなら、蛾と同じだな)

苦笑はするが、不安はない。

エイジの手にはたしかなぬくもりがあるからだ。

そして、光に呑みこまれた瞬間、そのぬくもりが強くなった気がした。

.....

.....

眩しすぎて、目を閉じていた。

空いているほうの手も思わず、何かをつかんでいた。

ああ、どこかにたどりついたんだということはわかる。

そういえば、手だけでなく全身があたたかい。

でも、この感触は何だ.....?

そこで、何か嫌な予感がした。

「こ、ここは.....?」

エイジはゆっくりと、確かめるように目を開いた。

目の前に自分と同世代の少女がいた。

いたというか、その上に乗っていた。片方の手にいたっては、胸を見事につかんでいた。

「あっ、悪い！ 変な意図はないんだ！」

気恥ずかしくて、エイジは身を引いた。

それではやくやく周囲のものにも意識がいった。

何十人ではぎかない観衆が怖々と見守っている。衣服は和風のものでも現代的なものでもない。あまり機能性を考えていないようなローブやマントが多く目についた。

やけに開放感があるなと思って見上げると、何十メートルも天井が吹き抜けになっている。塔のような建物らしい。

壁も床もすべて石造りで、音はほとんどない。すべての音を石が吸いこんでしまっているかのようだ。

人が多い割には誰も話そうとしない。避けているような雰囲気すらある。

（異世界から来たとしたら当然か。人種が違うどころの問題じゃないよな）

「痛いな……もう……」

起き上がった少女がエイジを見つめてくる。

エイジも思わず見詰め返す。

意志の強そうな大きな瞳^{まなこ}。

高貴な印象を与える長い桃色の髪は後ろの大きなリボンで整えられている。

タイトな白いドレスには、紋章のようなものを圖案化した刺繡^{ししゅう}が施されている。スリットを入れればチャイナドレスのようになるだろうか。その上から、丈の短い黒のローブをかけている。ローブの裏には濃い紫がのぞいている。

白を基調にしているためか、好奇心の強い学者のように見えた。ただし、年の頃は、エイジとほぼ変わらないだろう。

思わず見とれてしまいそうな容姿だけれど——出会いが最悪だ。

（どうも、彼女の真上に出てきちゃったらしいな……）

不可抗力とはいえ、かなり失礼なことをした自覚はある。この世界の文化は知らないが、他人に、それも異性にのしかかれたら、怒るのが普通だろう。

そして、見詰め合った少女は、

「せ、せ……せ……せ……せせせ……」

口をばくばくさせている。シヨックで声も出ないのかと思ったが——

「成功しました!!! このリッカ・ザルスホストが魔札使の召喚に成功しました!」

幸い、喜びを噛み縮^かめているだけだったようだ。

そこに床に垂れるほど長いドレスを着た少女が出てきて、リッカに抱きついた。ピンクブロンドの髪に、青い髪飾りが映えている。

「よくやりましたね、リッカ! これで侯国は救われます!」

「フィエナール様! 必ず、わたしたち騎士一同この異世界の魔札使で王国の賊を追い払ってみせます!」

その二人のやりとりを見てから、ようやく周囲の人だかりも喝采^{かつさい}を上げだした。場が一体感に包まれた。中でエイジだけが浮いていた。

空気に取り残されているだけではない。服装も一人だけ違う。観衆の男たちはローブのような、ゆったりした服を着ていて、色も白や暖色系が多い。エイジのようなジャケットにジーンズなんて人間はどこにもいない。

「あのさ、ここはどこ……?」

「お城よ」

あっさりリッカという名の少女は言う。

どこの城だよ——というツツコミはとどめておいた。

「リカール侯国のお城にある礼拝塔ですよ。儀式もここで執り行います」
 フィエナーレと呼ばれていた少女が代わりに答えてくれた。見た目からして王族か、それに準じる人物なのだろう。この場の代表者のように見える。

説明はリッカより詳細になったが、出てきた固有名詞がまたわからないので堂々巡りになる。

「あの、リカール侯国っていうのは——」

「ところで、あなた、名前はなんていうの？」

リッカが逆に尋ねてくる。わからないことだらけなのは、向こうも同様だ。

「ちなみに、わたしは勝騎士にしてザルスホスト家の長女、リッカ」

「鷹津エイジ……血液型A型、帰宅部所属、高校二年生普通科だ」

その名のりで、リッカは少しびくりとあとずさった。

「聞いたことのない称号ね……。けれど、長い称号は、大抵身分の高い人間についてくるものだし……。まさか異世界の王族を呼び出したとか……」

「悪いが、それはハズレだ。全然偉くない」

その言葉に、リッカは本当に胸を撫で下ろした。全般的に感情表現が激しい。

「よかった。わたしより偉そうな立場だとやりづらから。じゃあ、小領主ぐらいのもの？」

「それよりも偉くない」

「まるで庶民ね」

「そう。たんなる庶民だよ」

だんだんとリッカの表情がほっとしたものを通り越して不安なものになる。

「そ、それじゃ……魔札使として従軍した経験は……?」

「ない」

「じゃあ、召喚霊を呼び出したことは？」

「もちろん、ない」

「ねえ、本当にそれで戦争ができるの……?」

その途端、場が静まり返った。どんなに寒い冗談を言ってもこんな空気にはならないのではないかとうぐらいに。

「リッカ！ その方のおっしゃっていることは本当のですか!？」

フィエナーレは悲鳴のような声を出す。一度声の途絶えた観衆のほうも、さざめきだつ。不穏な空気だ。

「やっぱり、戦争をしてるんだな」

もちろん地球でだって戦争はリアルタイムで起きている。それでも、エイジの目の前にそんなものが迫ったことは一度もなかった。奇妙な感慨のようなものがある。

「戦争というか、侵略されてるのよ」
リッカが答えるが、エイジに構う暇はなさそうだ。より多数の不信の声を抑えなければいけないのだ。

「聞いて下さい！ ゲートは魔札使^{マジ}の力がより強い人間の前で開くものです！ 従軍経験はなくても、十分な戦力になる逸材のはずです！ だから、どうかご安心を！」

リッカの弁明もどこか余裕がない。

（これはまづいこと言ったかな……）

エイジも反省する。自分が即戦力かそうでないかは、国の命運に関^かわることらしい。

「待ってくれ」

リッカを引き継ぐように、エイジは口を開く。

「俺は戦争に出たことはないけど——元の世界のカードならそれなりに強かったぞ。きっと、この世界でも役に立てる」

「強いて、どれぐらいよ？」

リッカが不安げに尋ねる。英雄を欲しているのだとしたら、村一番だとかそんな次元では事足りぬと思っているだろう。

サバを読んでおいたほうがいいとエイジは判断する。

「俺の世界では、いくつもカードはあるんだけど、そのうちのひとつで、六十億人か七十億

人のうちで67位の腕前だった。あと、国は大小二百近くあったな」

「六十億、七十億？ ふざけないで！ そんなに人がいるわけが——」

エイジは自分の、『ネオアルカディア』のデッキをケースから取り出す。

「これが、俺が使ってたデッキだ」

リッカがまじまじとのぞきこむ。

「わたしたちのカードと……似てる」

空気がまた奇妙な落ち着きを取り戻す。平穩が訪れたというより、何を言葉にしているかわからない戸惑いが場を支配していた。

「あなた、これを」

リッカは一枚のカードをエイジに手渡した。

エイジのものよりひとまわり大きなカードには、氷の肌を持つ精霊が描かれている。

カードは、目を覆いたくなるほどの赤い光を発している。何かに照らされているのではなく、カードみずから光っている。

「その精霊をできるだけ早く呼び出してみなさい。強く光ってるでしょ。それだけ呼び出すのにも力が要するだけ早く呼び出して示してるの。それで、あなたの言葉がウソかどうか判断できるわ」

「呼び出すって、どうすればいいんだ？」

尋ねながら、エイジは『ネオアルカディア』のルールを頭に思い描く。

「俺の世界では、エナジーボトルが必要なんだが」

「わかってるじゃない。はい、こっちがエナジーボトルのカードよ」

次に渡されたのは、真ん中がくびれた大きな水差しの水差しの描かれたカードが十枚ほど。

『ネオアルカディア』のルールであれば、このエナジーボトルを場に展開し、魔力が足りるようになれば、召喚や魔法のカードを唱えることができる。

エイジは一枚のカードに「動け」と念じた。

足元にイラストの通りの水差しが姿を現す。映像ではない。明らかに陶器だ。

深く息を吸ってから、水差しをもう一つ、足元に出現させる。まだ足りない。召喚に必要な魔力は精霊のカードに書かれていないが、エナジーボトル二つで足りる〈召喚霊〉じゃない。

三つ目のエナジーボトルを出した時、精霊のカードの赤い光が青紫のものに変わった。

（これでいいんだ）

エナジーボトルに魔力を出せと命じた。水差しはゆっくりと傾き、清らかな水のようなものを床にこぼす。

瞬間、エイジの体に何か熱いものがめぐった。

直感的に右手で持った精霊のカードに左手の人差し指を触れる。

途端——小さな反動がエイジの体に来た。何かがそこから飛び出た。

目の前に、全身が水でできた精霊が立っている。

観衆がざわめく。まるで、その精霊の登場を讃えるように。

〈幻像場ミラージュ〉のような映像とは違う。この質感、量感、存在感——明らかに本物がいる。精

霊の間近にいるせいか、冷気まで漂ってきている。

生物ではないのだろう。でも、モノでもない。

そのどちらでもないものを呼び出したとしたら、これはまさしく魔法使いとしか言いようがない。

思わず、その精霊のきらめく氷の体に手を触れようとした。

「やめておきなさい。氷の精霊に触ったら、手が離れなくなるわよ」

リッカの言葉で我に返った。

「彼は一度目の召喚で精霊クラスの〈召喚霊〉を呼び出しました！ 実力はあるはずですよ安心して下さい」

多少、落ち着きを取り戻した顔でリッカが言う。

どうやら、信用を得るだけの力はあったようだ。フィエナレを筆頭に、その場の空気は穏やかなものに変わっていく。

ただし、リッカの頭には、また違う種類の違和感が湧き起こっていた。

（魔札使としての力はわかかったけれど、いくらなんでも早すぎないかしら……？）
いや、余計な不安をあおる必要はないのだと、リツカは心の中で疑念を殺した。

（今はこの場が静まればいいのよ。力だつて確認したんだし）

「リツカ、あなたの力、たしかにこの目で見届けましたわ。これからも、この国のために力を貸して下さいね」

フィエナーレが親しげにリツカに微笑む。

「はい！ ありがとうございます！」

すぐさまリツカが頭を下げる。子供が教師に謝っているようにもエイジには見えた。

「さあ、あなたも頭下げなさい！」

エイジは頭に手を当てられて、無理矢理腰を曲げさせられた。



しばらく待たされたあと、エイジはリツカに塔から連れ出された。儀式用の服からリツカが着替えてくるまでに時間があったのだ。

リツカが無言で黙々と歩いていくので、エイジもどう声をかけていいかわからない。

広間を出て、中庭のようなところを通り、石畳の道を歩いていく。空気もようやく開放

的なものに切り替わった気がする。

それをきっかけにしたのか、リツカがエイジのほうに目を向けた。

「あなた、この世界のことって知ってる？」

今のリツカは目が覚めるような、藍色の丈の短いワンピースと、ノースリーブの白いコートに着替えている。先ほどの肌の露出がまったくくない服装からすると、ワンピースとブーツの間から覗く太ももと、露になった肩が目眩しい。

「いや。わかることと言ったら、言葉が通じるってことぐらいか」

「まあ、そうよね。しばらくは教育期間が必要ね」

と、リツカはため息をついた。

「これから、どこに連れていかれるんだ？ できれば衣食住を保証してもらえるとありがたいんだけど」

「安心しなさい。まずはその三つが満ち足りる場所に案内してあげるから。その変な服もあとで着替えなさい。ネオアルカディア中を歩き回っても、そんな服着てる奴はいないわ」

「この服って、変なんだな」

「それ、走りやすそうではあるけど、かっこいいとは言えないわね」

平安時代の日本人に高校の制服を見せたら異民族だと思っだろう。服飾の価値観は世界

によって、まったくまちまちだ。異世界人にネクタイが何の役に立つのかと言われると、エイジも答えられそうにない。

「あとで着替える。替えの服を用意してくれ」

「はいはい。一人だけそんな服を着てるんじゃ、規律も何もあったものじゃないしね」
建物の造りなどを見たところからすると、中世ヨーロッパに近いだろうか。

「この国のことを、異世界人にざっと説明してくれないか」

「ここはリカール侯国。ティエール半島の南東部。気候は北部の山地を除けば、温暖」
地理は一度頭からどけた。あとで地図でも見て確認したほうがいい。

ただし、あとまわしにできない案件もある。

「隣国から侵略されてるらしいな」

国を救うだのなんだのといった言葉も耳に残っている。攻めている側がそんな言葉は口にはしないし、勝っているなら得体のしれない部外者を呼ぶわけがない。

「事実上の侵略だけど、厳密には内戦ね。敵はサクラッド王国。これも王国の領内ではあるから」

「悪い、混乱してきた。そこをゆつくりと頼む」

ポケットからミニノートとボールペンを取り出す。デッキと同じく、ジャケットに入っていたせいで一緒に持ってこられたものだ。

図で描けば理解が早まるだろうと、この世界で自分以外の使用者のいない言葉を並べていく。

この地域にはサクラッド王国という大国があるらしい。

その王国は国内に大公や諸侯を配置し、王に逆らわない限りでの自治を認めている。

「で、ここはリカールを支配する諸侯の国だから、リカール侯国ということか」

「そういうこと。諸侯はもともと独立国の君主だった相手に与えられる称号。王家の親族に与えられる称号が大公。大公が治めるのが北のサニア大公国ね」

「諸侯は江戸時代の藩、大公は御三家みたいなものか。あ、そのまま続けてくれ」

「侯国は平和に上手くやってたと思うわ。国も豊かで安定してた。銀山だってあるんだから。けど、だからこそ、王国に目をつけられたのよね」

「半独立国を併合して、力を集中させたい王国側と、反対する侯国側——か」

侯国側は王国の軍を食い止めるのに手一杯の状態。

スタート地点から追い詰められている。

(これぐらいでないと面白くない)

エイジは小さく左手を握りしめた。

歴史をひっくり返してやる。滅びそうなこの国で、天下を取る。

「やる気はあるみたいね」

少しリツカはほっとしたような顔を作ってから、
「だけど、これで魔札使として無能だったら、ただじゃおかないからね。わたしの家は末代までの恥さらしよ……」

殺意に近い目でエイジをにらんだ。

「わ、わかった……努力する……」

努力してどうにかなるものかはわからなかったが、そう答えるしかなかった。

リツカとエイジは城の敷地を出て、堀にかかる橋を渡る。

その先は城下街か。城の周囲は石造りの建物が並んでいる。道も白い石で舗装されていて、太陽を受け、眩しいほどに輝いていた。

「現実の中世ヨーロッパはずいぶん街が汚いはずだけど、ここは大丈夫だな」

「ヨーロッパって何？」

「俺の世界の地名だ。気にしないでくれ」

言葉は通じるが、固有の地名は認識されないらしい。

(ついでに街の規模について聞いておくかな)

スケールがわからないと、軍事作戦も立てづらい。

「リツカ、この街の人口ってどれぐらいだ？」

ぴたっ。リツカが足を止めた。

回答を考えるために立ち止まったのではないようだ。その証拠に、振り返った顔は不服そうだ。

「あなたね、さっきから騎士身分のわたしに対して、呼び捨て？」

(機嫌の悪い子犬みたいだな)

「騎士身分は最低でも、中級貴族に匹敵するのよ。不適切な言葉遣いだけで不敬罪で鞭打ち百回ぐらいにはできるわ」

「悪い。そういう趣味はないんだ」

リツカはしばらく間を置いてから、顔を赤らめた。

「変なこと言わないでよ！ まあ……異世界の住人なら身分も何もないか。それに騎士団は下の名前で呼び合うことになってるし……わかったわ、その呼び方でいい」

「光栄でございます、ザルスホスト家のお嬢様」

恭しくエイジは頭を下げる。

「もう！ ちゃんと覚えてたのね！ そうよ！ ザルスホスト家は代々、サール湖一帯を治めてるわ！ あなたと対等に話しているだけ、感謝しなさい！」

遊ばれているとわかって、リツカはさらに顔を赤くした。しかも、異世界から来たばかりの何も知らない少年に、いいように扱われているのだから、三割増しで腹立たしい。

エイジは昔から要領がよかった。

覚えておかないといけない情報を頭に入れて、すぐに整理ができる。相手の身分や立場なんでものは基本中の基本だ。それで、相手との接し方にも変化が生じるからだ。皇帝と奴隷に同じ言葉を遣うのは、宗教家ぐらいしかいない。

それと、昔から不敵で不遜なところもあったが。そうでなければ、外の世界に入るゲートなんてくぐるわけがないのだ。

「次は…：そうだな、この街のことについて教えてくれ、リッカ」

まだイライラしているようだが、リッカはどうにかこらえて、

「ここは侯国の首都、セントリカール。人口は五万八千人だったかしら」

中世ヨーロッパの基準で考ええると、かなりの都市だ。人口十萬の都市を数えても五本の指でお釣りが来る時代があったはずだ。

「したら大都会だな。栄えてるのはわかった」

「まだ市街地も歩いてないのに、よくわかるわね。それで、あなたの住んでた街はどれぐらいの規模なの？」

「俺の住んでたところは調布^{ちゆうふ}って言って、二十万ちよつとかな。けど、少し東に行くと、周辺含めて一千万人クラスの街がある」

「一千万!? からかうのもいいかげんにしなさいよ!」

「悪いが、ウソじゃないんだ。たしかに人は多すぎると思うけどな」

また、リッカが足を止めた。今度は信じられないような話を聞いたせいだろう。一千万人が一箇所に集う光景でも想像しているのかもしれない。それから、また小走りでエイジの横に並ぶ。

「あとは、敵とこっちの軍勢を教えてください」

「おおかた、敵が二万とか三万、こっちが一万とかその程度だろう。」

「一つの戦いで、相手が多くて五十人、こっちが二十人ってところかしら」

「なんだ、それ? 軍隊はどうなってるんだよ」

今度はエイジが驚く番だった。桁^{けた}が二つは足りない。隣村同士の抗争ならわからなくもないが、国がぶつかり合うには規模が見合わない。

「軍隊はあるけど、戦争には使えないから」

「えっ?」

「戦えるのは、魔札^{まさ}使^{つか}だけ。あ、着いたわ」

リッカがもう一度足を止める。

三階建ての石造りの邸宅。

「ここが騎士たちの『屋敷』よ。エイジだっけ、あなたは扱いは傭兵^{ようへい}だけど、特別に入れてあげる」

謎が残ったまま、エイジは『屋敷』に入っていった。

「ここはね、騎士でもあった貴族が何十年前に寄贈してくれた建物なの。当時は宿もまともになかったし、地方から来た騎士が泊まる便宜をはかってくれたのね」

「つまり、寮ってことか」

エイジは建物内部に目をやる。

外は石だったが、内側は柱を除けば、大半は木でできており、あたたかみがあった。壁に掛けてある油絵も地球に持ってきても違和感のないでさばえだ。もとが貴族の邸宅だったと思わせるだけの手の込んだ造作ぞうさくと言っている。

「共有スペースの掃除や食事は騎士団が雇ぢやうきくってるウェーテルおばさんがやってくれるわ。さて、空いてる部屋はと——」

「あ、その前にさっきの話の続きを頼む」

「どこまで話してたっけ？」

頭にクエスチョンマークが浮かんでいそうなくらい、きょんとした様子で聞かれた。

優秀な騎士なのかもしれないが、話をしている感じは女子高生と大差ない。

「戦えるのは魔札マジ使イジだけってどういうことだ？」

この世界は地球ではない。まして日本でもない。

ならば、まずはその世界のルールを把握しておかないと生きられない。

「あのね、今、世界は戦乱の真つ最中なの。直接の原因は今から百年ほど前に起きた奇妙な現象のせいね。王国がティエール半島を統一して間もない頃ころだったはず」

「奇妙な現象？」

「人間は殺戮ころりく行為や略奪行為ができなくなったの」

「なんだ？ どっかの法律でルールでも決めたのか？」

「実例を見せたほうが早いと思うわ」

リツカは腰こしに提さげているナイフを抜く。

鞘さやには稠密ちゆうみつな幾何学模様が彫りつけてあり、厳かな雰囲気すら匂におわせている。

「それ、武器というよりは身分を示すものだな。実用性より、手が込んでることを見せようとしている気がする」

「そうね。騎士にしか携帯が許されていないものだから。でも、実用性もあるわよ。試ししてみる？」

「試すって何で——あっ」

そのナイフがエイジの胸に突き刺さっていた。

柄つかまで埋もれそうなほど深く。

ためらいもなく、リツカが刺したのだ。

「え、これ、冗談じゃないよな……」

「刺さってるかどうかぐらい、わかるんじゃない？」
その瞳からは罪の意識も、悪巧みの意図も感じられない。

たんなる作業であるというほど、無造作な手つき。

「まいったな……こんな終わり方は考えてなかった……」
たしかに芹香はこの世界に来る時、リスクをとまなうと言っていた。

何も知らない場所に旅立つのだから、当然だ。

それでもかまわないとゲートをくぐったのだが、自分を呼び出した少女本人に刺されることまでは読めていない。

認識の甘さが出た。役に立たないと感じた異世界人を処刑することぐらい、十二分にありえる話だ。

「驚いた？ 驚かないわけがないわよね」

「ああ………死ぬほど驚いてるよ」

ナイフが乱暴に引き抜かれる。

その傷口から赤い血が流れ——ない。

傷口もない。服に穴も空いていない。

それに、刃物が刺さった痛みすらもない。

エイジが傷ついた証拠が存在しない。

「こういうこと」

リックがしてやったりという顔になる。何もかも演出と演技だったのだ。

恐る恐る、「傷跡」を触ってみるが、ただ皮膚の手触りがあるだけだ。日本の交番に駆けこんだとしても証拠不十分で立件は無理だろう。

「これが魔札使の力なのか？」

「違うわ。もっと大きな世界律の問題。ある時から、こういう人殺しや略奪はできなくなったの。あつ、自分の胸は絶対に刺したりしないですよ。自殺は起こりうるからね」

あわててリックが例外事項を付け足した。

「自殺は他人による残虐行為じゃないからな。これじゃ、軍隊による戦争も成立しないはずだ」

シヨックで痛みを感じる余裕がなかっただけかと思っていたが、先ほどのナイフは最初から痛みを生まなかったのだ。

「神様が平和を愛せとおっしゃっているんだって言うてる人もいるけど、詳細は不明。そもそも、神様の存在が確かめられていないわ」

地球の無神論者のようなことをリックは言う。

「だけど、仮に神様のせいとしても、平和を愛してるなら、戦争の代替手段なんて用意しないと思うわ」

人が殺されることのない世界。

それだけ聞くとずいぶん平和に聞こえる。

戦争などありもしないように聞こえる。

だが、この国は滅亡の危機に瀕している。

「その代替手段っていうのが——」

「これよ」

リックがまた、腰に手をやる。今度はナイフではなくて、こぶし大のケースだった。チェーンでベルトに固定されているのは、紛失防止のためだろうか。

漆黒の光沢があり、重厚な金属のようだが、よく見ると光り方が少し異なる。

「これ、漆塗りか？ その上に金箔を貼りつけてる」

「ウルシっていうのがどんなものか知らないけど、メルネーレっていう木の樹液を採取し、塗りつけてるの。そこに金粉と夜光貝をはめこんでいくってわけ」

「おそらく、日本の螺鈿装飾と似たような技術だな」

「ケースなんてどうでもいいけどね。大事なものは中身よ」

リックは得意げにケースの紐を解いた。そこから、カードを一枚取り出す。

エイジが礼拝塔で渡されたものと裏は同じようだ。

「原形は占いのカードだったらしいわ。そのカードを使って、一部の人間は特殊な力を

生み出せるようになったの。この力は罪もない人間を傷つけることはできないけれど、同じカード使いを痛い目に遭わせることはできるわ」

（『ネオアルカディア』の世界観と似てるな。けど、当たり前か）

芹香はこの世界の実情をそのまま、地球のカードに落としこんだのだ。

「各国はカードの製作と能力者の獲得に躍起になった。その能力者が魔札使と呼ばれてるわけ。練習して身につけることもできるみたいだけど、九割方、生まれた時の素質で決まるわ」

「百年前から人間は魔札使同士で戦争をするしかなかったわけか」

概要はこれでわかった。

（だから、俺が呼ばれたわけだな。素質があるか不明だけど）

この世界では、カードバトルが戦争と直結している。あとは、カードバトルと魔札使のことを知ればいい。

「リック、早速、カードのルールを——」

「魔札使の適性検査と教育は明日でいい？ もう、日も暮れてきてるし」

たしかに窓ガラスからは夕焼けが見てとれた。さっきの眩しかった光は西日だったのだ。「そうだな。新生活にもなじまないといけないし」

慣れないといけないのはカードのルールだけじゃない。新しい環境にもだ。

「こっちが、エイジの部屋になるはずなだけど——あっ」
廊下に小柄な少女が一人倒れていた。

見た目は小学校の中学年ぐらいか。小学校という概念があるかは別として。

「なあ、この国だと子供は床で眠るものなのか？」

「そんなわけないでしょ。はしたないわ」

「じゃあ、これ、まずいんじゃないのか!？」

もし、ケガか病気で倒れているとしたら、大問題だ。

「あ、たぶん、大丈夫よ。よくあることだから」

「はい……こけただけですう……マユは足元が不如意なもので……」

子供にしては難しい言葉を口にした少女が起き上がってきた。

ポプカットの髪は、両耳をすっぽり隠していて、どことなく丸みがある。

服装は今のリッカのものと変わらない。ミニのワンピースの上にコート。ただし、コートのサイズが合っていないくて、地面をずるずる這っている。

「紹介の時間が省けたわ。この人がうちの副官よ」

「はじめまして！ 副官の宗騎士マユ・ファンダイクなのです！ よろしくお願ひしますです！」

丁寧なべこりと少女は頭を下げた。

「なお、騎士階級は上から聖騎士・宗騎士・勝騎士・大騎士・庶騎士の五段階に分かれますが、宗騎士は現在、侯国内でマユしか認められていません。聖騎士である侯女フィエナール様を除けば二番目に偉いのです！ どうぞ、好きなだけ褒めて下さいなのです！」

「え、子供だけど……？ 見た目の背が低いとかじゃなくて、純然たる子供だけど……？」

「子供扱いしないで下さいです！ マユは野菜が食べられるのですよ！」

「発想が子供、だ」

マユは何やら腰にくくりつけているポーチをいじっている。

何が出てくるのかと思ったら、まん丸な飴玉だった。

勢いよく上に放り投げて、見事に口で受け止める。

「むにゅむにゅ、飴も一日三十個から二十個に減らしたんですよ。子供じゃありませんから、むにゅむにゅ……」

「二十個でもまだまだ多いぞ……」

「仮に子供だとしても魔札使としての力は大人に負けませんから。一騎当千で鎧袖一触なのです」

（そうか、肉体的な力はこの世界では意味を成さないんだな）

暴力を行使できないなら、兵士が男である必要も、大人である必要もない。

大切なのは、カードが強いかどうかだけだ。

「あなたが異世界の魔札使さんですよ？ 変わってる服です
興味津々でマユがのぞきこんでくる。

「うん。ニホンっていう国から来た」

「なるほど」。歳はそっちが上でも、マユが先輩ですからね！ これから、マユたちが
みっちりしごきますから！ 粉骨砕身働くつもりでいて下さい！」

びっし！

マユが元氣よく人差し指を前に突き出した。

「マユのしごきはすごく厳しいですよ！ おやつのパンケーキは五個までです！」

「うん、守れると思う」

「夕食後のクッキーも十五枚までですよ！」

「大丈夫だ。それも守れる」

いろんな意味で甘い特訓になりそうだ。

「マユはお菓子が大好きなの。子供だから」

リツカがぼそっと小声で言った。

「リツカさん！ マユは子供じゃないです！ 事実無根です！ 子供って言うなら証拠の
書類持ってきて下さい！ でなきゃ、子供だって言うほうが子供ですっ！」

「子供だな……」



まあ、魔札使^{マジ}の実績と年齢は関係ないとしても、子供なら当然言動は子供っぽくなる。「なんか、あきれってますね。マユは立派な騎士なのですよ。今は武術も習っていて、受け身の練習だつてやっています」

「おっ、それは本当の武人っぽいな」

「です！ こう、コートが長いと——」

マユの体が後ろに傾く。

かかとでコートを引っかけてしまったらしい。

「わわわっ！ わわわわわっ！」

ばたん。

そのまま、背後に頭からこけた。

「いたたた……です……」

「おい、大丈夫か？ 頭打つてないか？」

「ふええ……平気です……。こんなふうにはコートを踏んづけて、こけることがあるので受け身の練習をちゃんとしなさいといけないのです……。頑張りますです……」

マユは両手で頭を押さえている。ちよつと涙目だ。

「そうだな……。けど、まずコートのサイズを子供用にするべきじゃないか……？」

「マユは子供じゃありませんから、このサイズでちょうどいいんです!!」

断固とした口調で言われてしまった。

「お、おう……。うん、大人ならそれでいいよな……」

「それでは、マユは食前のおやつを食べてきますので！」

そう言つて、マユはばたばた駆けていった。

「はわわわっ！ コート踏みましたっ！」

で、またこけていた。

「なあ、リッカ、質問がある」

「何？」

「この国には食前のおやつつて習慣があるのか？」

「そんなものないわ」

リッカも疲れた顔をしていた。

「アクシデントはあったけど、エイジの部屋に案内するわ」

ようやく、エイジ用の空き部屋にたどり着いたのだが——

「空っぽだけど、これでいいのか？」

「よくないわ。ベッドも机もないし……。これじゃ、ただの箱よ」

「雨風はしのげるが、もう一声ほしいところだな」

「飼い猫でも、もっといいところで眠るわ。よく見たら、窓ガラスも割れてるし。雨風さえ、入ってくるわ。こんな部屋で寝泊まりさせたら、侯国は半島中の笑い者よ！」

ここに住まうエイジよりもリックカのほうがはるかにあわてていた。エイジを呼び出した手前、責任を感じているのだろうか。

「ちよっと、厨房のウエーテルおばさんに確かめてくる！」

リックカは一階に降りていく。エイジもついていく。空の部屋で待っていても仕方がない。厨房は仕込み中らしく、タマネギの匂い^{にお}がした。受け入れられないほど異質な食文化ではなさそうだ。

頭に頭巾^{づえ}をした大柄の女性が、せわしなく働いている。いかにも寮母^{りょうぼ}という風情^{かぜい}の五十歳ぐらいのおばさんだ。リックカと目が合うと、ぱっと花が咲いたように笑みがこぼれた。

「あら、リックカちゃん。ソーセージでもくすねに来たのかい？」

「違いますよ。あと、ソーセージをくすねるのはマユで、わたしはそんな恥ずかしいことしません」

「あのマユって子、やっぱり子供だな……」

「おや、その変な服の子は誰^{だれ}かな。さては、リックカちゃんのボーイフレンド——」

「異世界から来た傭兵^{ようへい}よ、ウエーテルおばさん」

「ああ、そっかそっか。けどね、リックカちゃん、あまりカードのことはかり考えていると、

恋をする時間を逃しちゃうよ。せっかく、領地から離れた都に出てきてるんだからさ。ぐずぐずしていると、こんな樽^{たる}みみたいな体になっちゃうよ、はははははははは——

「恋愛は国が平和になったら考えます」

マイペースのおばさんにリックカも結構苦戦しているようだ。向こうからすれば、娘のように見えるのだろうか。

「それでね、おばさん、傭兵用の部屋なんだけど……」

リックカは部屋の惨状を手短に伝えた。

「ああ、悪いねえ。お城から余ったベッドを持ってくる予定だったんだけど、向こうも予備がないみたいだね。明日になれば届くと思うんだけど。窓の修理も明日にならないと業者が来ないしねえ」

のんびりした調子で言われた。話からして、ウエーテルが責任者でもないし、どうしようもなさそうだ。

だが、不意に、ウエーテルの唇の端が吊り上がった。何かを企^{たく}んでいるみたいに。

「今日のところは寝具もないし、リックカちゃんの部屋で寝かせてあげたら？」

「そんなこと、ありえないです！ どうしてわたしが男と同じ部屋で！」

リックカが真っ赤な顔で抗議した。

エイジは、そのへんは日本と同じ感覚なんだな、と後ろで見ていた。おそらく、純真な

リツカは日頃からこんなふうにからかわれているのだろう。

「も、もしものがあつたらどうするんですか……。彼は男で、しかも異世界人なんですし……」

「自分で召喚した人をそんなふうに疑つたら、この世界の人は礼がなつてないと思うかもしれないよ」

「それは、まあ、そうかもしれないですけど……」

「だいいち、そんなことはありえないはずだしねえ」

ウェーテルは自信を持って言う。

「今の時代、人を襲うことはできないんだからさ。だから、絶対安全よ」

（ああ、あのルールの適用範囲なんだな）

——殺戮行為や略奪行為はできない。

つまり、非人道的なことは起こりえないか、意味を成さないのだ。

リツカがエイジのほうを振り向いた。

ぱつが悪そうに、視線はそらされていたが。

「エイジ、あなた、前の世界で投獄歴なんてないわよね……?」

「善良な一市民だったよ。ケンカもした記憶がないな」

「わかったわ。それじゃ……部屋を用意ができるまでは、わたしの部屋を使いなさい」

「ああ、聞いてたからわかる」

「だけど、ま、まかり間違つても変なことしないでね……」

「変なことしようとしてもできないんじゃないのか?」

「実行しようとした時点で追い出すわ!」

「成功しないとわかつてるのにやるわけないだろ。もし、計画するとしたら——」

少し、エイジも悪ノリした。

「——リツカに受け入れてもらえる自信がある時だけだな」

「へ、変なこと言わないでよ! わたしは貴族の娘よ!」

リツカはもう、つかみかからんばかりの剣幕だ。

「安心してくれ。これでも文明人なんだ」

そこにウェーテルが楽しげな顔で口をはさむ。

「お嬢様はいいところの出でわがままだから、気をつけなさいね」

「はい、リツカの扱いは心得てますので」

「どうして会って間もないのにそんなことがわかるのよ!」

すぐにリツカの苦情が飛んできた。

「はいはい、夕食の時間は近いよ。食堂に行つて、待つておいて。はははっ!」

エイジの感覚からすると、一、二時間は早い夕食だった。窓から空を見ると、夜というよりは夕方に近い。

（電気が一日中ついているわけでもないだろうし、朝型の生活なんだろう）

食堂でリックと待っていると、どんだん人が増えてきた。まず入ってきたのが、アンフェルスという中年のひげ面の男だ。

「彼がアンフェルス、食堂には大抵一番に来るのよ。戦闘じゃ後ろを守ってるくせに」

「傭兵さんよ、俺、何歳に見える？」

「四十代の半ばですかね」

「正直だな。答えは三十三だ」

すでに酒が入っているようにげらげら笑われた。案外、本当に入っているのかもしれない。

ひげをたくわえた人間の年齢を当てるのは難しい。まず、日本にそんな人間はほぼいないから、見慣れてもないのだ。

そのあと、女性にしてはずいぶんと長身なニューセ、落ち着いた雰囲気的女騎士マイラ、みつあみのシャーレンと続く。ウエーテルを入れて、総勢十七人。

（この食事も結束を高める意味があるんだろうな。戦場じゃ、一緒に戦うわけだし）

現在の軍隊でもそのあたりは踏襲されていたはずだ。まさしく、同じ釜の飯を食うとい

うやつだ。

ウエーテルを除くと、女の魔札使が十人、男のほうがエイジを入れて六人。戦争に出るとはいえ、男女の性差はやはり関係ないらしい。女性率が高いせいか、余計に騎士という感じはしない。雰囲気も開放的なようだが――

（でも、俺はイレギュラーな余所者だからな）

向こうからお呼びがあったとはいえ、エイジは異世界の人間だ。気味悪がられることぐらいは仕方ない。

でも、それどころではなくなった。

――リックと同じ部屋で寝るとウエーテルが言ったことで。

「おいおい、召喚学っていうのは、男の連れこみ方も学ぶのか？」

「けっこういい男ね。リックとケンカしたら、私の部屋にきなさい」

「酒は飲めるか？ 酔った勢いでいってみろ」

完全に話題はそっちに流れてしまった。

「もう、みんな、やめてよ！」

リックが叫ぶが、むしろ、みんなにいじられる的になっただけだ。

「リックちゃんは男つけがないから、わたしや、心配してただよ。練習だと思いな。それに、彼の教育係はリックちゃんがするのが筋だろう？」

ウェーテルがそう言うのと、リッカも赤くなつて黙りこんでしまう。(どうやら、ファーストコンタクトとしては成功だな。リッカが生贄になつてるけど)「新人の加入で、王国側も蹴散らせればいいんだけどな」

「期待してるからね、エイジ君」
そんな声まで騎士から飛んでくる。忌避するというよりは、藁にもすがりたい気持ちなのかもしれない。

それはそれで悪くはないとエイジが思いつけていた時――

「おい、みんな、本気で言ってるのか!」

料理皿で埋まった机を叩く、どこか湿った音。

両耳にピアスをした銀髪の青年が立ち上がった。歳はおそらく二十歳ほどだろう。(俺のクラスに来たら、女子が嫉妬するぐらい、きれいな髪と目だ)

そんな他人事のような感想をエイジは抱いたが、相手の目は自分をにらみつけている。

「ついさっき、異世界から来たばかりの若造に国を任せるとか? みんな、騎士としてのプライドはどこにいったんだ?」

(それも言われるよな。正論、正論)

青年の反応は予想の範疇だ。エイジから遠い席に座る何人かが、彼の発言に同意するようにならずいたのも見えた。

「そう言うなよ、トゥール」

ひげ面のアンフェルスがなだめに入った。

「傭兵さん、こいつはトゥール・パステイーン。リッカと同じ地方出身の騎士でな。まあ、リッカの先輩だ。悪い奴じゃないんだけど、酒を飲まないせいか、根が真面目すぎてね」

「真面目なんじゃない。正しいことを言っただけだ」
むすっとしたまま、トゥールは着席した。

リッカもやりづらそうな顔をしている。

「よろしく願います、パステイーンさん」

エイジは笑いながら頭を下げる。戦う前から争うつもりなんてエイジにはない。

「まだ、僕は認めてないからな。リッカの召喚学者としての能力は認めているが、それとこれとは話が別だ」

そこで、多少言いつらそうにして、

「だいたい、同じ部屋で寝るだなんて、一日だけとはいえ……ばかっている」

騎士たちの何人かが、笑みをかみ殺した。重苦しい空気も抜けていく。

リッカはどちらかというと、その変化についていけず、きょとんとしている。

「まあまあ、リッカちゃんが呼び出した子をリッカちゃんが面倒見るのは当然だろ。そんなことより冷めないうちにわたしの自信作を早く食べておくれ」

最年長で寮母役のウェーテルがその場を収めた。ただ、エイジに対する不信まで拭きされたわけではない。(ま、不信のほうは実力で証明するしかないな) 言うまでもなく、ここは実力社会だ。

だったら、そのために知識は早目に身につけておきたい。

「あの、地理関係を押さえておこうと思うんですが、誰かご教示願えませんか？」

食後の雑談の時間になったところで、エイジが切り出した。

「わたしがやるわ。ちょうど広いテーブルもあるし」

リックはそう言って、席を立つと、巻いた絨毯のようなものを持ってきた。広げてみると、布製の地図だった。

「わたしは召喚学のエキスパートだけど、地理を含めた一般教養も万全だから。何でも聞きなさい」

力を誇れるチャンスが来て、リックもどこか浮かれている。

「まず、わたしたちがいるのがサクラッド王国のここ、セントリカール」

海に向かって、西に突き出た半島の根っこ側と言っていいところだ。リックが人差し指をぴんと立てて、地図上の小さな円を示した。

「この半島はティエール半島っていうの。実態は別として大半はサクラッド王国の領土よ。

サクラッドが完全に支配しているエリアは半島の西側、つまり先端側ね。首都はコーティアって街ね」

「残りの部分はこの侯国みたいに、諸侯が支配してる属国ってことか？」

「だいたい、それで正解かな。王国の南東部はこのリカール侯国」

「そういや、リックの名前と国の名前って、似てるな」

「親が国の繁栄にあやかかってつけた名前なの。続けるわよ。王国の北東部、つまり、この侯国の北部にはサニア大公国があるわ」

リックの白い指が北にスライドしていく。リカールとは異なる色のところに入った。

「大公はサクラッド王家の分家に許された称号だったけど、今では百年前の王弟が初代になってる一族のことを言うわ。侯国と王国の争いに関しては中立状態ね」

「血筋からして味方につけるのは難しそうだな」

「大公国は気にしなくていいわ。国境付近は大山脈だから」

たしかに両国の境目は急峻な山間の土地だ。地図の色からそれがわかる。直接、アプローチできそうにない。

「どうにか山を越えてきても、その先にはエルフの自治領があるわ。勝手に踏みこんでくれば、エルフの魔札使たちが放っておかない」

「エルフの国っていうのは独立国なのか？」

位置からすると、侯国の最北端にあたる森林地帯だ。

「一応は侯国領だけど、実質、エルフの部族社会なの。だから自治領ってわけ」
 「国内における少数民族統治政策か」

こういった緩衝材があるせいとか、大公国との接点は薄いのだろう。

これで、侯国の西と北の勢力はわかった。大公国が王国と一緒に攻めてこない限りは、北も安全だろう。南は海なので、現状放っておいてもいい。残るは東だ。

「この侯国の東側、色が違ってるのはどこの勢力だ？」

「それはエツザ宗っていう宗派の荘園領。そこは友好的にやってるわ。侯国でもエツザ宗の信者は多いし」

「援軍は期待できるのか？」

「たいして人口規模もないから、用意できる数は知れているわ。エツザ宗も王国と正面切って争いたくはないだろうし」

「ありがと。だいたい、関係性はつかめた」

侯国だけで、いかに王国を倒すか。目的としてはシンプルだ。

（相手は立场上、親みたいなものだし、侵略さえやめさせればいいのか）

ただ、地図から判断しても国力が違いすぎる。魔札使の数だっけ向こうが上だろう。
 （馬鹿正直にぶつかっても勝てないな。いずれ、策も考えるか）

「エイジさん、難しそうな顔してますね」

マユが心配そうに声をかけてきた。

「デザートのパンケーキ、お口に合いませんか？」

「いや、そんなことはない」

「いらぬなら、マユが代わりにいただきますでしょうか？ ぐじゅじゅ……」

マユがよだれを垂らしているので、エイジはパンケーキを譲った。



そして、夕飯のあと。

「ここがわたしの部屋……。きれいに使ってたね」

しぶしぶといった顔でリツカが扉を開ける。

エイジが見た空っぽの部屋と同じサイズなのだろうが、ベッドやら何やらが置いてあるので、ずいぶん狭く見える。エイジが知っているホテルの構造とだいたい同じだった。

「散らかってはないけど……そっか……」

「ちょっと、その『そっか』って反応は何よ？」

「いや、どの世界でも女の子の趣味っていうのは似てるなあって」

窓にはピンク色のカーテンが吊るされてるし、机にはちゃっとした小物も置いてある。ベッドの上の毛布もピンク。壁紙もピンクだ。全体的にピンク推しだ。

それと女の子っぽいといえば、猫の顔だけのぬいぐるみがやたらと置いてある。ぬいぐるみが好きな男もいるだろうが、少なくともエイジの部屋にこんなものは一つもない。

「これは何だ？ 猫の首を狩る趣味でもあるのか？」

「そんな猟奇的なことするわけないでしょ！ かわいいから置いてるの！」

ピンク色の絨毯の上にひとまず座るが、どうも居心地が悪い。

「暖色系の色ばかりで落ち着かないな……」

「嫌なら、出ていって来てもらいたいわよ」

「寝る場所がなくなるのは困る」

毛布だけは『屋敷』に余っているものを持ってきている。床で寝ることにはなるが一日ぐらいであれば耐えられるだろう。

「あ、そうだ、トイレは部屋ごとにあるのか？ さすがにないよな」

「そのドアを開けたらあるわ。お風呂はそっちのドア。今、沸かしてるところ」
確認すると、トイレには水を流すための紐までついてた。

「すごいな。水洗かよ」

風呂場もレバーのようなものがあって、それで火をつけられるようだ。どうも浴槽全体

がコンロの上の鍋みたいな構造になっているらしい。

「五右衛門風呂をハイテク化したようなシステムか」

毎日水浴びで我慢するぐらいの覚悟はしていたのだが、これなら心おきなく熱い風呂に入れそうだ。

「あつ、もう沸いてるみたいね」

リッカが楽しそうに浴槽に手を入れて湯加減を確かめている。

「そしたら、わたしはお風呂に入るから。眠る前にゆっくりお風呂に入る、これこそ、人生の醍醐味よね」

「ああ、ごゆっくりどうぞ」

「それと、確認なんだけど」

「うん、何だ？」

「エイジの世界に、人の入浴中に勝手に入ってもいいって文化はないわよね？」

「ないない！ 下手したら捕まるぞ！」

リッカの目に疑惑の光が灯る。

「先に言っておくわ。どこ出身の人間だろうと、のぞきでもしたら容赦しないから」

「冷静に考えてくれ……。俺はこの世界で知り合いなんて一人もいないんだ。お前の信用を失ったら、終わりだろ……」

「ま、それもそっか」

どうやら多少は信用してもらえたらしい。

「それと、今のエイジの扱いはこの世界だと傭兵ようへい、つまり平民身分だから。わたしは勝騎士しょうきし、貴族階級だから。のぞいたりすると、より重い罪になるから、そのところよくわきまえててね。本当によくわきまえててね」

「やっぱり、たいして信用されてないな……」

かといって、信頼を勝ち取るには、それなりの時間が必要だ。出会って半日では弁明の言葉だって上すべりする。

「それじゃ、お前が風呂入ってる間にこの世界の勉強でもしとく。初学者用の教材しよがしやってあるか？」

「一階に書庫はあるわよ」

——ということで、書庫に降りた。

個人用の部屋を三つ並べた程度の大きさの部屋だ。さほど広くはないが、書齋のようで、くつろぐにはちょうどいいかもしれない。

(書庫にいれば、のぞきの容疑者になることもないだろ。一石二鳥だな)

読書をする人間なんていないのか、それとも部屋で読むのか、誰もいない。

本は子供向けの絵入りのものから、政治思想や教典のようなものである。おそら

く、元の持ち主の蔵書をそのまま一部屋にまとめたのだろう。雑多な分、異世界の学習には都合がいい。

ちょうど子供向けの文字の学習教材があった。日用品のイラストの横つらに書いてある。どうやら表音文字らしく、文字の数は六十を超えている。

「母音部分+子音部分でそれぞれ別の文字を使ってるのか。日本語圏に住んでよかったな。感覚的にローマ字の構造と近い」

まだ、この地に降り立ったばかりだが、時間は待つてはくれない。王国側はじわじわと侵略を進めている。

その王国の首都であるコーティアから侯国側の首都、センタリカールまでは地続きの平原だ。その途中にさえぎる山があるわけでもない。距離も早馬で四日ほどらしい。

もし、侯国側の都市に拠点でも築かれたら、一気に攻め落とされかねない。

呼び出してくれた国があっさり滅ぼされたのでは話にならない。どう考えても、それはゲームオーバーだ。

「だから、まずは言葉だな。カードが読めないんじゃ、論外だろ」

日本人用の辞書などないから、パズル的に読み解いていくしかない。なかなか難易度は高い。

少なくとも高校の教科書より、はるかに難解だ。

しかも、気を抜けば、国が減ぶ。自分の身がどうなるかもわからない。だが、だからこそ——最高に面白い。

「勝ってやるぞ、絶対に」

エイジの時計で二時間経つまで書庫にこもっていた。この世界も二十四時間で計算はしているようだが、時計が円形ではなく、棒状になっているのでわかりにくい。分針がだんだん左側から右側に移動する。右側の終点に来ると、また左側に分針が飛んで、次の六十分を刻むのだ。

「よし、一回、部屋に戻るか」

ぶっ通しの作業はどうしても理解度と能率を下げる。休憩も兼ねて、そろそろ風呂に入りたいところだ。冷めてしまうのもばからしい。

カードについての本を何冊か抱えていく。これは風呂上がり目に目を通す予定のもの。ぱらぱらめくってみたところ、図で示しているところが多く、そこまで難解ではなさそうだ。

「リック、夜の勉強は終わっ——」

部屋には誰もいなかった。先に眠ったのかと思ったが、ベッドも空だ。

「あいつ、どっか行ったのか?」

でも、談話室のようなものはなかった。使うとしたら食堂だが、その横も書庫から戻る

時に横切った。暗いままだった。

「まさか、倒れたりなんてしてないよな……?」

いくらなんでも二時間の入浴は不自然だ。

人が殺されない世界とはいっても、病気や事故は起こりうる。

「日本でも昔は風呂での死亡事故が多かったんだよな」

たしか、風呂で倒れないようにする呪文まで密教では考え出されていたはずだ。それに、突然死する歳でなくても、眠っている間に溺死することはありうる。

「リック、無事か?」

脱衣場に入り——続いて風呂場の引き戸を開けた。状況が状況だ。言いつけを素直に守っている場合ではない。

「眠ってたら、起きるよ!」

「へっ?」

ごく普通にリックは入浴していた。

アヒルのおもちやがやけに浮かんでいるが、まあ、普通だ。

「な……なんで、入ってくるの! こんな堂々としたのぞき、聞いたことないわ!」

「のぞきじゃない! だって、異様に風呂長いだろ! 長すぎるだろ!」

「これぐらい普通よ! 休日なら半日は入ってるわよ!」

「体、ふやけるぞ！」

「と、とにかく、お風呂から出てよ……今すぐ！」

リッカが胸を押さえて叫ぶ。

たしかにエイジも無意識のうちにそこに目がいつてしまっていた。

これまで気にしていなかったが、同世代の女子の中では大きめな気がする。大きすぎるというわけではないが、かといって小さいということもなくて……。

「ちよどいいいな……」

「何がよ……」

(しまった……余計なことを口に出してた……)

誤魔化さないといくらなんでもまずい。

「ええと……湯加減ちよどいいかな……?」

「熱すぎたり、冷たかったりしたら二時間も入れないわよ」

「おっしゃるとおりだ」

「とにかく、すぐに出てって！」

ただ、風呂場から顔を引っこめても、こんな声が後ろから飛んできた。

「うーんと罰を受けてもらうから、覚悟しておきなさいよねっ！」

部屋でエイジは額に手を当てた。



「不覚だ……平均的な入浴時間も聞いておくんだった……」

◇ ◇ ◇

「——というわけで、お前の身を案じた結果であって、そんなやましい意味合いはない。断じてない。そういうことだ。わかってもらえたかな？」

腫れた頬でエイジは弁解を繰り返す。

風呂から戻ってきたリツカにしこたまつねられたせいだ。

まだ、ひりひりする。一生で一番痛いつねられ方かもしれない。暴力に対する苦痛はまったく存在しないのだと思っていたが、そんなことはなかった。暴力じゃなくて罰だからなのか、こんな些細なことはルールの適用外なのか、そこはわからない。

「話はわかったわ」

「ご理解、感謝する」

思わず、両手で拝むようなしぐさをする。その身振りで拜んでると認識されるかわからないが、エイジには日本人の身体表現が身についている。

「——だけど、されたことは気に入らない。とっても気に入らない」

どうも、許しが出るわけではない。

「だから、謝ってるだろ……。事故だ、事故……」

エイジは困った顔でリツカのほうを見る。顔を背けて弁解したら、余計に失礼だ。ただ、立腹中の顔を見ていられないので、視線が下がって、胸のあたりにいく。

(Cより上つばいよな……。でも、Eだと大きすぎる。だとしたら、必然的にDか) リツカがはっとして手で胸を隠す。

ネグリジェ姿ではあるが、上からガウンを着ているから露出はない——はずだ。それでも、かすかに胸元にのぞくネグリジェがエイジを落ち着かなくさせる。

「目で穢すのやめてよ……バカ……」

「それだけしつかりガウン羽織ってたら何も見えないだろ」

「それでも、精神的になんか嫌なの！」

なかなか関係改善は難しいらしい。被害者の心のケアはどこの世界でも大変だ。

「はあ……こんな形で信頼を損ねるのは不本意だ……」

「わたしも事故なのはわかってるわよ……」

エイジの反応を見て、リツカも気まずそうに顔をしかめた。

「じゃ、許してくれるんだな!？」

「だから、そうは言っていない! されたことは気に入らないの! いわば、これは事後よ!」

「なんか、嫌な表現だな……」
と、懸念材料がエイジの頭に浮かんだ。

不明なことがある場合、最悪のケースを想定したほうがいい。

「まさか、裸を見られると結婚しないといけないとか、そんな風習はないよな……？」

「ふ……ふ……」

「ふ？」

「ふざけるなつつっ！！ そんな馬鹿げた風習あるかつっっ！！」

リツカが猫のぬいぐるみを投げる。

頭の部分しかないぬいぐるみなので、ボール状で投げやすいのだ。

(ファンシーグッズだと思ったら、投げたりするんだ……)

——などと考えているエイジの顔にぬいぐるみが命中した。

ふわふわのものだと思ったら、意外と重かった。脳が揺れて、視界が一瞬白くなる。

(げっ、このぬいぐるみ、中に砂が入ってるぞ……)

しかも、猫の頭部ぬいぐるみはまだまだ一ダースほどあった。

「待て！ 落ち着け！ あくまで確認しただけだ。そうじゃないなら問題ないだろう！」

「どこまで辱めを与えれば気が済むのよ！ こっちは騎士で貴族よ！ これで魔札使として全然使えなかったらタダじゃおかないからね！」

「タダじゃおかないって、たとえば……？」

「侯国の岬から船で一日いったところに無人島があるの。そこに島流し。ちなみに獣は一切いなくて鳥も寄りつかないから、虫ぐらいしか食べるものはないわ」

エイジも本気で身の危険を感じた。

「わかった……。明日からの訓練は頑張る……」

生き延びるためにはそう答えるしかない。これで魔札使として三流とでも認定されたら、その時点で人生は終了だ。

「あっ、そうね、明日から訓練なのよね」

リツカの表情に邪悪な笑みが宿る。

「何だ、その『企んでます』って表情は……？」

「この借りは明日返すわ」

「おい、訓練の名を借りた暴力はダメだぞ……」

絶対そのつもりだ。

これはまずい。

だが、企みが返上されることはなさそうだ。リツカの顔を見たらわかる。

「マユも言ってたでしょ。みっちりしごいてやるわ。できるだけ、みっちりとね！」



試される朝

翌朝。日本の感覚で、六時前ぐらいに起こされた。やはり、朝が早い世界らしい。食堂で、穀物の粥かゆにジャムを入れたようなものを食べたあと――

「はい、この中からデッキを組んで。枚数は六十枚以上」

リックカに『屋敷』の一室に連れていかれた。

それと、マユもついてきている。興味でもあるのだろうか。

部屋には、カードの入った木箱がずらずらと棚に並んでいた。

カードは属性ごとに分かれているらしい。

白のカードで示される〈天界の属性〉、以下、青の〈広海の属性〉・紫の〈精神の属性〉・赤の〈大地の属性〉・黄の〈加護の属性〉・緑の〈生命の属性〉・黒の〈邪悪の属性〉。

そこまですが古代からあったらしい色の価値観に見合った属性で、人間が意図的に造ったのが灰色の〈人造の属性〉だ。ただし、これは魔力の絶対量さえ足りれば誰だれでも使用できるため、厳密には属性とカウントされていない。

ただ、カードの大半は〈精神の属性〉のものだ。紫色が多く目につくからすぐわかった。

「ここは騎士団の余り物カードの保管場所。まずはそれでデッキを組んでみて。三時間で練習をはじめから」

「三時間か。了解、了解」

エイジは『ネオアルカディア』のインスタントデッキ戦を思い出す。

インスタントデッキ戦とは、配布された未開封のカードの中から、短時間でデッキを組んで戦うものだ。

もちろん、コンセプト色の強いコンボデッキはカードが揃そろわないから不可能だし、強いカードが入っていたかどうかの運も重要だ。

しかし、なによりも限られた資源を最大限に利用する頭が必要だ。大会レベルのデッキでは見かけないようなカードをいかに活躍させるかが勝敗を分ける。

余り物でデッキを作るのだから、今回のもそれに近い。

「わからないところも多いだろうけど、まずは自分なりに組むこと。座学を何時間も続けなくても、眠くなるしね。使い方は実戦形式であとで教えてあげるわ」

「ああ、わかった。鳥流しにするのをためらうデッキを作ってやるよ」

「威勢がいいのは評価するわ」

リックカも少し表情をゆるめる。

今、侯国の騎士団にほしいのは、王国を追い出せるのではないかという「夢」だ。

エイジの自信はその夢を見せる。

「ところで、マユはどうしてついでにきてるんだ？ 暇つぶしか？」

その発言にマユはくちびるをとがらせた。

「違います！ 副官は忙しいのです！ 毎日十時間しか寝てません！」

「十時間も寝てるのか……」

「この部屋のカギは副官のマユが管理しているのです！ マユがいないと部屋も開けられないんです！」

「そうだった……。マユは偉いんだったな、悪い……」

どうしても、見た目と身分が一致しないので混乱する。

「ところで、島流して何の話なのですか？」

「ああ、昨日、リツカの風呂をのぞいちゃってな……」

そのあとにぬいぐるみをつつけられたこともセットで思い出す。

「でも、不慮の事故だぞ。二時間も入浴なんてわかるわけないからな——」

また、猫のぬいぐるみが当たった。しかも、後頭部だった。

「ぶっ！ お前、どうして用意してきてるんだよ！」

「余計なこと言わなくていいのよ！ 黙ってなさいよ！」

リツカが顔を朱色に染めて抗議する。ちょっと照れているというレベルじゃない。頭か

ら煙でも出てきそうなほどだ。

（そう言われればそうだな……）

被告として罪を隠すのは人としてまずい気がして正直に話したが、冷静に考えれば堂々と言ったからといってリツカが喜ぶ内容でもなかった。

「へえ、そんなことがあったのですか。興味深いです」

やたらとマユは何度もうなずいていた。

「エイジ、三時間後が楽しみね」

リツカが笑いながら言う。

「なあ、どうして笑ってるのに俺は殺気を感じるんだろ……？」

「ポコポコのギタギタのダラダラにしてあげるから覚悟しなさい♪」

「ポコポコとかはわかるが、ダラダラって何がダラダラ垂れるの……？」

「エイジの体を流れる赤いものに決まってるじゃない♪」

「血みどろの教育……」

背筋に冷たいものを感じながら、カードに目を通す。

最初はどこか恐る恐るだった手が——数分の後には次々にカードを繰るものに変化していった。

瞳も、爛々と輝きを放っている。

まるで、カードの精霊にでも取り憑かれたように。
「なんだか、やけに楽しそうね……」

少し、気味悪いものでも見るようにリツカが言う。

「ああ、本当に面白いんだからな」

悪意というものを知らない幼子のような目。

けれど、その目は明らかに戦争の道具に向けられている。

今日、初めて着たはずの、騎士団の制服があまりにも似合っていた。リツカの先輩のような風格すらある。

「つ、疲れてきたら、自分で休憩入れなさいよ……」

「そのつもりではいるけど、楽しすぎて休憩、忘れちゃうかもな」

リツカとマユが戻っていったあと、エイジはデッキ作りに没頭した。

三時間後。

エイジは野外のただっ広い芝生に連れ出された。

なんでも、軍の演習場らしい。そこを魔札使の騎士たちが拝借しているのだ。

ずいぶん縮小化されているとはいええ、軍隊はまだ存在しているらしい。災害時の対応など人力が必要な分野はいまだに残されている。

ただ、実際に戦争ができるのは魔札使の側だから力関係は歴然としている。

エイジの前にはリツカが仁王立ちしている。

その周りにはギャラリーである騎士たちがいる。

新しい傭兵の立ち回りに興味津々なのか、雑談にも花が咲く。

「なんでも、早速風呂をのぞいたらしいぞ」「だって、リツカの胸、大きいし」「実はリツカが誘ったって本当？」「体も洗わせてたとか」「リツカって支配欲強そうだからなあ……」

「待て！ なんてそんなに話が広まってるんだ！」

明らかに騎士への伝達率がよすぎる。とくにトゥールに関しては今にも抜刀して斬りかかってきそぞだ。

「貴様は色情魔として、ネオアルカディアに来たのか？ これで役立たずだったら、反逆罪で終身刑にしてやる！」

「トゥール、終身刑なんて生ぬるいわ。鳥流しよ」

後輩の怒りは先輩よりさらに激しいらしい。

「マユに話したからに決まってるでしょ！ マユが知ったら全員が知ってるのと一緒よ！ マユはとんでもなくおしゃべりなの！」

距離を置いて対峙しているリツカが肩をそびやかせていた。

「そんなこと、俺は知らないんだから仕方ないだろ……」

「マユはおしゃべりで、副官なのに機密を教えてもらえないこともあるぐらいなのよ！」

「それは副官としてダメだろ！」

「とにかく、ダラダラにしてあげるわ……」

もはや、特訓とか練習とかいった言葉はリツカの頭から抜けていそうだ。

「それじゃ、ひどい目に遭わないようにひとつやってみるか」

エイジは腰に提げているデッキケースに目をやる。ケースも余り物だが、それでも鳥や鹿しかの図案が彫りこまれた金属製のものです、決して安っぽい容れ物ではない。

枚数は最低六十枚。

最初に引く手札は七枚。

そのあたりは『ネオアルカディア』と同じだ。

大事なものは、異なっている点のほうだ。

厳密な使用コストはカードには書かれていない。

厳密な〈召喚霊〉の攻撃力も防御力も書かれていない。

厳密なプレイヤーのライフポイントは不明。

結局、この世界は生身の人間がカードで戦うのだ。

だから、〈召喚霊〉が与えるダメージも一義的に決められない。自分のライフポイントだつて体調次第で変動しうる。

ただ、使用コストのほうは、数値化はされていないが、判断材料がある。昨日読んだ魔法マジ使の入門書には、こんなことが書いてあった。

勝負がはじまれば、すべての魔法のカードはルビーのごとき赤い光を発するのであろう。

これは、まだ魔力が足りていないということを意味する。その光が強いほど、唱えるのに多量の魔力を必要とする。

では、魔力は何によって生み出すのか。

エナジーボトルを起動せよ。そこからこぼれ出た魔力は、使用者の体をめぐる。その力はほかのカードの妨害がない限り、しばらく時間を置けば回復する。

もし、唱えるのに十分な魔力を発生させれば、光はサファイアのごとく青きものに変わる。

（まあ、数値化されてませんってことだけ覚えていればいいだろ。あとは、感覚だな。慣れていけばいい）

魔力を発生させる基本がエナジーボトルというのもまったく変わらない。【精神のエナ

ジロボトル」というカードがこの世界にもある。

この世界の大会優勝デッキなんてものはないから傾向まではわからないが、作れる範囲で強いデッキにはできたと思う。

(あとは、それを勝負で証明すればいい)

幸いというか不幸というか、リッカはとことんやる気らしい。自分がどれぐらいやれるか、嫌でも答えが出るというものだ。

「本気でいくからね。昨日のお風呂のことがチャラになるぐらいは」

「これでチャラになるなら安いもんだ」

「その言葉、後悔させてやるわ。気を抜かないようにね」

(そんな失礼なことほしくないさ)

だからこそ、手にできる情報はできるだけ仕入れておく。

「ところで、リッカ、お前は騎士の中だとどれぐらい偉いんだ？」

リッカにしゃべらせて、情報を引き出し出しておきたい。もし、デッキの内容がわかれば、それに合わせて戦略も多少変えることができるかもしれない。

「一言で言うとうち三番目だよ。勝騎士なんて、そうそういないからね」

「五つの騎士階級のうち三番目だっけか」
頭に昨日聞いた階級を思い浮かべる。

——聖騎士・宗騎士・勝騎士・大騎士・庶騎士。

もちろん序列が真ん中といっても、この手の階級は上にいけばほとんどいない。聖騎士も宗騎士も一人ずつなのだ。勝騎士クラスならせいぜい騎士団で三、四人だろう。

「しかも、わたしは騎士だけじゃなくて、召喚学のほうでも教授クラスだし。魔法も科学もトップレベルってことよ」

エイジにしてみれば、召喚だって魔法の範疇なのだが。

(ま、価値観の違いだな、そこは。数百年前は錬金術も陰陽道も科学の範疇だったんだ) ここまでは昨日の復習でしかない。

「召喚学の力は魔札使としても活かされてるわ。(固有存在)も呼び出せるんだから」
「のーぶる?」

聞いたことのない概念だ。

「(固有存在) っていうのは、この世界でたった一人しか召喚できない、特別な(召喚霊)のこと。いわば、人格のある(召喚霊)ね」

「そっか。ちょっと見せてくれないか。何もわかってない人間に本気を出すのも気が引けるだろ?」

「なんか、調子のいい話ね……」

(ちょっと強引すぎたかな……)

「しようがないな。魔力の負荷はかかるけど、特別だからね」
 リツカはまんざらでもない顔になる。小学校の徒競走で一位になった生徒がこんな顔を
 する、エイジはそんなことを思い出した。

リツカは【精神のエナジーボトル】のカードを自分の足元に投げる。
 そこから、小さな白煙が上がる。

煙が去ったあとには、大きくくびれた白い水差しが姿を現していた。

「カードはこんなふうに見現化するの。ここから魔力を出すのよ」
 ルール上はすでに戦闘ははじまっているのだ。

ただ、エイジが何もしないのでリツカの行動が連続しているように見える。

（この世界にはターンの概念もないな。けど、【エナジーボトル】の設置にはそれなりの
 時間がかかる。なら、プレイング自体の速度を上げて、相手を出し抜くのは……まあ、本
 番でもたまたましてる奴なんていないから、無理か）

ゆっくりとリツカは【エナジーボトル】を並べていく。手札に当たるものは、リツカの
 前で宙に静止し、赤い輝きを放っている。

「もう少し待っててね。慎重にやらないといけない呪文だから」

リツカも変に間が空いてしまうので落ち着かないようだ。

外野からは「寝てるから出てきたら起こしてね」という野次も飛ぶ。時間のかかること

をよく知っているのだろう。

「ところで、カードを使って召喚するのって、いつでもできるのか？」

もし、そうなら敵の魔札使が眠っている間に、奇襲を仕掛けることもできる。

「そのあたりは場数を踏んで覚えるしかないわ。明文化は一切されてないから」

「え……？」

明文化されていないのは、カードの内容だけではないのだ。

「誰がこういうルールを決めたかわからないからね。でも、卑怯なことは効果を持たない
 し、国同士の戦いなら開始をちゃんと知らせないとダメっていうのは間違いないわ」

「一般的な常識から判断しろってわけか」

「街で魔札使にからまれたりした場合はケースバイケースね。ただ、相手に売られたケン
 力を買わないからって無事かはわからないから注意して。そういう非公式の戦いは、戦う
 意志さえあればはじまつちゃうこともあるから」

（このカードを作った何者かは、思った以上に慎重だな）

言葉でルールを縛らないというのは、ゲームマスターにとって最も都合な方法だ。

ルールが言葉になった瞬間、それはゲームマスターも均等に束縛するし、ルールの抜け
 道を誰かが考え出す危険がある。

それが嫌なら最初から、明文化しなければいい。

まして、カードバトルがたんなるゲームの外側にまで影響力をおよぼす世界なら、なおさらのことだ。

部屋で寝ている魔札使に火の玉をぶつけられるのか。敵国に攻めこみ、魔札使ではない一般人が居直って動こうとしない時、カードの力で追い出せるのか。例外規定は山のように増える。そんな特殊なケースすべてに言葉での解答を用意するのは不可能だ。

(だとしたら、早くこの世界の常識に慣れないとまずいな)
 妥当な判断は体で覚えるしかない。

一方、リックの前には【エナジーボトル】がずらりと並んでいる。まるで水差しを売る商人のようだなとエイジが思った時——ボトルが自然と倒れて、そこからこぼれた何かがリックに吸いこまれていった。

リックの前に浮き上がって展開されていたカードが一斉に青く発光する。召喚可能というサインだ。

「出てきなさい、【霧の大精霊サーラウネ】!!!」

エイジはその光に、神々しさと本能的な恐怖を同時に感じた。

(これが魔札使の力か……)
 形になる前から確信できる。

こんな力を駆使できる人間が無数にいれば、彼らを中心に歴史が動くのは必然だ。

リックがカードを目の前に投げる。また白い煙とともに、何者かが姿を現す。

その場に立っていたのは、どこか人魚然とした姿の少女だった。

いや、立つというより——正確には浮いている。

ふわふわと揺れている髪は、後ろでポニーテールのようにまとめられていて、東洋的な雰囲気がある。

霧の大精霊と聞いたが、むしろサキュバスか何かではと思うほど妖艶だ。日本にも天女の羽衣伝説があるが、それを大胆にしたら、こうなるだろうか。服というより露出の多い水着に近い。胸も、リックのものなんて冗談だったみたいに大きい。

(やけに大胆な衣装だな、これ)
 エイジも自分がどきまぎしていることに気づく。

昨日まで身分としては一高校生だった身としては刺激が大きすぎる。

「あなたが遠い世界から呼び出された傭兵さん？」

生身の人間と変わらない言葉と態度でサーラウネは話しかけてくる。

「あ、はい、そうだけど……」

「私はリックの所領にあるサール湖の精霊だね。リックが魔札使になる前から遊んでいたの。あの子、貴族であると同時に、湖の神官の一族なのよ」

「そっか。この世界、カードが生まれる前から、精霊が実在してたんだな」

「うちのリツカがお世話になるわ」
ぺこり。

サーラウネがおしとやかに頭を下げた。

体を動かすと、羽のようにまわりに浮いている衣がゆらゆら揺れる。

「え、あ……はい……わかりまし……た……」

「違うでしょ、サーラウネ！ お世話するのはこっち！」

「リツカ、見栄張って私を召喚したからお疲れ？」

「だから、サーラウネ、余計なこと言わなくていいの！」

「こんなふうに呼び出されたものが人格を持っている、それが私たち、〈固有存在〉の特徴ね。普通の〈召喚霊〉が引っ張り出されるのに対して、私は出てきてあげてるってわけ」

「力関係が逆転しているってことか」

サーラウネから目をそらしつつ、エイジはうなずいた。

「人の顔を見ないで話するのは失礼なんじゃない、君？」

すっとサーラウネがエイジに近づいてきた。

足音もなく——というより、霧の大精霊に足音なんて概念はないのかもしれない。

「いや、俺の住んでた国だと、目上の人と目を合わせるほうが無礼なんだ……」

「ネオアルカディアにもそんな風習の国、あったわねえ。かといって、話す時に顔まで横



には向けないでしょ」

サーラウネの言葉の通りだ。体だけは彼女の側に向ける。

「ああ、会話する時は視線は顔より少し下に向けて——」

胸元に目がいった。

「……やっぱり、目を見て話をするのでいいかな？」

「ええ、こちらの風習を理解してもらえてうれしいわ」

わずかな笑みにも妖しいものが香る。

（このあたりの価値観も合わせていくべきなんだろうけど、まだ大変だな）

「そしたら、練習試合をやってみなさい。私、横で見てるから」

「あなたを召喚したせいで体力使ってるんだけど……。あと十分休めない？」

リッカは少しつらそうな顔をする。

うつすらとだが、額に汗が光る。

（カードバトルと違うところはここにもあるな）

カードを使用できるのは、選ばれた魔法使いたちのみ。

ゲームのようにルールどおりにやれば、誰でも召喚できるわけではない。

相当の能力がなければ、〈固有存在〉も使役できないはずだ。

（リッカもかなりの使い手ってことだな）

「体力使ってるって？ リッカ、それ、本気で言ってるの？」

馬鹿にしたようにサーラウネは笑う。

「傭兵さんはずぶの素人よ。あなた、初心者の練習にまで完全に対等な立場を要求するの？ 戦争の時でも、そう相手に言うつもりかしら」

「わかったわ！ このままでいい！ どうせ結果は同じだし！」

リッカがカードケースを取る。

外に散らばっていたカードが自然とその中に収まっていく。

山札として残っていたカードもランダムに一枚ずつケースに飛んでいった。

「カードのシャッフルは自動的に行われるわ。ズルはできない。絶対に」

「イカサマが存在しないのは正直助かる」

エイジもデッキを、リッカにならってセットする。

カードケースから出したデッキは——エイジの前に浮遊し、淡い黄色い光を放つ。

「カードバトルは飽きるほどやったけど、さすがにこれは緊張するな。でも、こんなに面白いゲームなら飽きることもないか」

「エイジ、やる前に一つだけ忠告しておくわ。危ないと思ったら負けを認めなさい」

すでにリッカの表情は戦闘時の真剣なものに変わっている。

「意識を失うまでやろうとしないように。でないと——」

「――二度とカードが使えなくなるからだろ」
それは夜に勉強して確認した。

このカードバトルは術者の精神力と連動している。

ゆえに、ダメージは苦痛として認識されるし、ダメージを受けて敗北するようなことがあれば意識を失う。目覚めても魔札使としての力は消えてしまうという。

そのせいか、この世界での勝負は途中棄権によるものが多い。

「それもあるけど、もっと単純な理由よ。意識を失ったら死ぬかもしれない」
恐ろしさを伝えるためか、リツカはわざとそっけなく言った。

「意識を失うことと目覚めることは必ずしも連動してないわ。目覚めないことだって、ないとは限らないんだから」

知ってはいたことだが、あらためて聞くのは気分のいいものではなかった。

この世界では、戦争で人は死なない。

ただし、唯一の例外がある。

魔札使は魔札使同士の戦いで命を落とすリスクを持つ。

戦争自体の抑止力として与えられたルールなのか。

それぐらいの精神力を賭け金にしないと魔札使になれないのか。

そして、すべては真剣勝負。

練習試合だから安全ということにはならない。

「委細承知だ。何も問題ない」

その程度の恐怖で今更動けないなどということはありえない。

「それに、ここで怖気づいても、島流しになるんじゃないのか？」

「わかったわ。叩きつぶしてあげる！」

「ああ！ 全力でいく！」

――試合開始だ。

お互いの手元に山札から七枚のカードが飛んでくる。

両者、【精神のエナジーボトル】を場に出す。

まずは魔力を作れないことには何もはじまらない。

だが、エイジの動きはこれで終わらない。

【エナジーボトル】から魔力を生み出す。一枚のカードが青く光る。

宙に浮くその一枚を軽く指で突いた。

「まず、【雲の雑兵】を召喚」

もう見慣れてきた白煙のあとには、軽装の兵士が姿を見させている。普通の人間と異なるのは、露出している肌がぼやけた雲という点だ。

「ほんと、『ネオアルカディア』とは全然違うな。リアルさの質が違う」

ここでは、〈召喚霊〉が現実存在する。

「そんな雑魚なんか出してほしい役に——」

「もう一人、【雲の雑兵】を召喚」

寸分たがわぬ兵士が左側にも出現する。

「えっ!? どうして二体も最初から出せるのよ!」

奇妙な感じを覚えたのはリックカだけではない。

観衆も同じだ。不穏なざわめきが起きている。

つまり、エイジ以外の誰も違和感を受けていた。

たしかに【雲の雑兵】は容易に召喚できるが——

「【エナジーボトル】一つで二体も出せたっけ……?」

「出せるんだから仕方ないだろ。魔力貯蔵にも個人差があるんじゃないのか?」

「それでも早すぎるんじゃない……」

まだリックカは動けずに二つ目の【エナジーボトル】を出す。

「よし、お前ら、リックカを狙え」

兵士一体のハンマーが横からリックカの脇腹をとらえた。

「いたっ!」

当然、あがる悲鳴。ショッキングな光景だが、目をそらすわけにはいかない。これは訓

練ではあるが、命が懸かっているのだ。敵を攻撃するたびに目をそらす騎士などありえない。

ただし、もう一体は勝手が違った。

「鬱陶しいわね! あっち行きなさい! 【退却の風】!」

リックカのカードから突風が起る。

吹き飛ばされた兵士は場から姿を消す。代わりにエイジの手札に兵士のカードが現れた。

「そっか。〈召喚霊〉を手札に戻すカードだな」

敵の動きを確認したうえで、二枚目の【エナジーボトル】を出す。

「【盛気楼のワニ】を召喚! けっこう重そうだけど、すぐ出せるんだな」

ワニというよりは恐竜と言ったほうがいいような巨体が地面を轟かす。

「ちょっと! そいつはもっと重いカードよ! 序盤から出せる奴じゃないわ!」

「俺も絵柄からしてそうだと思うんだけど、出せるんだから仕方ないわ!」

もっとも、エイジも戦況を樂觀視はしていない。

「余ってたカードからして、この国は〈精神の属性〉の使い手ばかりだからな」

〈精神の属性〉は直接的な攻撃は苦手だが、代わりに敵を翻弄するトリッキーなカードが多い。

さっきのように手札に戻したり、山札に戻すのは当たり前。時には敵の〈召喚霊〉を操

り、攻撃させることさえできる。

（何もできないままなわけがない。必ず、何か手を打ってくる）
けれど、リツカはまたも【エナジーボトル】を置くだけだ。

「二体とも攻撃に入れ！」

獯猛なワニは消えたり現れたりを繰り返す。

そして、リツカの前で完全に実体化した。蜃気楼のワニと呼ばれる所以だ。

巨大な尾の一撃がリツカを吹き飛ばした。

「きゃあああああっ！」

数メートルは飛ばされて、肩から地面に倒れるリツカ。カードによるものだから、擦り傷のようなものはできないが、苦痛は確かに実在する。

「あれ……………？」

今度はエイジが違和感を覚える番だった。

（まさか、策がないのか…………？）

——数分後。

【水の精霊】、わたしを守りなさい！」

人間の三倍はあろうかという水の巨人がリツカの前をふさぐ。

（ようやく、本格的に攻勢に転じるつもりらしいな）

しかし——

すでにエイジの〈召喚霊〉はリツカを包囲済みだ。

【蜃気楼のワニ】はリツカの【停滞の鎖】という呪文で動きが緩慢になり、まともに使う物にならなくなっている。

ただし——その穴を埋めるように小型の〈召喚霊〉が場にあふれている。

一体は【水の精霊】にやられるだろうが、定石は犠牲を厭わずに全軍突撃を試みることだろう。

軽量〈召喚霊〉で攻め立てるのはカードバトルにおける基本的な戦略の一つだ。高度なプレイング技術がなくてもある程度動かすことができるし、単純な能力の〈召喚霊〉は稀少度が低い。カードの収集も比較的容易だ。

この世界の稀少度はわからないが、さほど珍しくないことは事実らしい。

（あいつをこのまま押し切るのは可能そうだな）
もっとも、そういうわけにはいかない。

この戦いは決闘ではない。

相手を完全に打倒したら取り返しがつかない。

「何よ……………下っ端〈召喚霊〉のくせに……………！」

リツカの目は黒く濁って、周囲の〈召喚霊〉をにらんでいる。

本気になって我を忘れているのかもしれない。
 (うかつなことをしてリツカの意識を失わせたらシャレにならない……)
 かといって、負けず嫌いだろうリツカに降参を宣言させるのも難しい。
 やむをえないので、時間を稼ぎ、リツカが冷静になるのを待つ。
 おそらく、リツカにとったら屈辱だろう。

新人に、しかも強力とは言えない〈召喚霊〉で追い詰められているのだから。
 ただし、エイジからしてみればこれは偶然ではない。

この戦闘でリツカの、いや、侯国^{こうこく}全体の問題点は理解できた。

(魔札^{まじら}使としての素質はあるんだろうけど、それを絶望的に生かしてない)
 それをどうやって聞き入れさせるか。

(とにかく、一度勝負をリセットしたほうがいい)

「くっ……こうなったら、あれを使うしかないか……」

リツカは何か覚悟を決めた顔になる。

大物が出てくるのはほぼ確実だ。

防衛する手段もないものの、エイジも思わず身構える。

「全部使えばどうにかなるっ！ 【精神のエナジーボトル】全起動！」

(「精神の属性」で能動的に魔力を大量消費することなんてほとんどないぞ……?)

巨大で致命的な呪文が来る。

「行くわよ、エイジ—— わっ！」

いきなりリツカの体が後ろに沈んだ。

ただ、その体は地面にはつかずに、豊満な胸に受け止められた。サーラウネがその肩を
 押さえていたのだ。

「はい！ 練習だし、もう終わりでいいんじゃない？ それ以上やると、王国軍が攻めて
 きた時に疲れが残るでしょ？」

「サーラウネ！ これは真剣勝負で—— いたっ！」

リツカの額をサーラウネが指ではじく。

「真剣勝負じゃないわ。特訓よ。熱くなって、目的を履き違えないように。単独行動が
 リツカの悪い癖だって何度も言われてるでしょう？」

「もう、試合終了でいいよな」

助け舟が来たところに、エイジも乗ることにした。

(サーラウネ、ありがとう。ほんとに助かった)

エイジもとっととカードを片づける。物騒なものはずっと出しておくべきではない。
 デッキケースに戻るよう力をこめると、それだけですべてのカードが収まった。

だが、場は一件落着とは言いがたい。

ギャラリーはどう感情を示せばいいのかわからないのだ。救世主の誕生を寿げばいいのか。

仲間が徹底的に敗れた事実には打ちのめされればいいのか。

エイジの結論を言えば、どっちでもない。

（騎士たちの戦略を改善するのが先だな）

「まさか……エイジがこんなに強いなんて……」

当事者のリツカはさすがに肩を落としている。

「いや、俺が強いのかはわからないし、お前が弱いのかもわからない」

「えっ？」

「国同士の戦いの時、いつも多人数同士でやってるよな？」

「そりゃ、お互いに一人ずつ残ったりしない限りは……」

「そういうことだ。多人数向けのデッキと一対一向けのデッキじゃ、設計思想が違いすぎる。マラソン選手と短距離選手、どっちが速いか聞くようなもんだ。俺はお前に勝つためにデッキを作った。お前のはいつもの多人数戦のデッキだろ」

リツカがあれだけ自信を持っていたということは、あのデッキでなんらかの成功を勝ち取っていたことを意味する。

たしかに長期戦が前提なら、重量級の〈召喚霊〉で囲むほうがいい。中盤以降で弱小の

〈召喚霊〉を出しても、敵を防ぐ壁にしかない。

「それでも、限度つものがあるけどな」

侯国には教育が必要だ。

学ばなければ、このまま滅ぼされる。

「なあ、この国のデッキって、リツカみたいなタイプが多いんだな？」

「まあ、そうね。その中でも最も攻撃的なのがわたしだけだ」

「……これまで王国に負けた時、どんな様子だった？」

「ええと……どんだん敵が兵士を召喚していったって、守りきれなくなつて退却して……」

「この国が負けてる理由はそれだ」

バランスがとれていないうえに、立ち上がりが遅い。動き出した頃に勝負がついているということになりがちなのだ。

カードバトル初心者がよく陥る落とし穴だ。速さの意義を過小評価する。

（でも、どうしてだ？ そのうち意義に気づきそうなものだけだな。ああ、一対一で戦うことがないせいかな）

人数が増えて勝負が長引けば大物を使う者の役どころが出てくる。露払いを務める者より、大物を出す側が評価を得る構造があれば、誰だって評価される側に傾いてしまう。

「はあ、わたし、情けないな……」

リツカが力なく、芝生に腰を下ろした。自分のデッキを見直しているが、明らかに覇気がない。

「リツカさん！」

そこにマユがたたたと駆け寄ってきた。で、コートを踏んづけて顔からこけた。

「ひゃっ！ 受け身を取り損ねました……」

「おい、大丈夫……か？ 盛大にこけたけど……」

「かまいません。リツカさん、これを食べて元氣を出して下さい。捲土重来けんとうちようらいなのです！」
また、飴玉あまたまだ。

「あ、ありがと……」

素直にリツカも飴玉を口に入れた。

「それはハーブの飴です。心を落ち着ける働きがあります」

どうやら何種類も飴を持ち歩いているらしい。ポーチから色とりどりの飴が見えた。

「エイジさんには勝利のご褒美の飴玉ですよ。リングゴ味です」

エイジのほうにもマユは赤い飴を差し出した。飴を口に入れると、どこかチープな甘い味が口の中に広がった。

「これ、やけに口の中、すうすうするわね……」

「ハーブだから、そのせいだろう」

「もちろん、それぐらいわかっているけどさ……なんだか眠くなってくる感じ？」

「ハーブのリラックス効果だろ。睡眠薬は入ってないと思うぞ。まさか……入ってないよな、マユ？」

怖くなって、エイジは念のために聞いた。自分の世界の常識を引き延ばすのは危ない。

風呂かの件でエイジも懲りていた。

「入ってるわけではないですよ。健康に害のあるものをたくさん舐めたりなんてしませんです」
ほっとする答えが出てきて、エイジは飴の効用に気づいた。

(これのおかげで空気がゆるんだな)

落ちこんでいたはずのリツカも忘れたように飴を転がしている。

「やっぱり、マユは副官だな」

おそらく、マユは空気の総体を見ていた。騎士全体に流れるムードがわかっていた。

「ええ！ マユは立派な副官なのです！」

両手を腰にあてて、「どうだ！」という顔のマユ。あまりに子供っぽいので、空気の切りかえも偶然だったのかもしれない。

そういえば、侯国は常勝どころか「全敗」していた。

なのに、大幅に戦力を失っているわけではない。撤退のほうの技術は折り紙つきらしい。

きつと、マユのような大局に目がいく人間がいるからなのだろう。

「見てなさいよ、エイジ。この恨み、どこかで晴らしてやるからね……」
けれど、近視眼的な騎士が一人混じっていた。

「おいおい……恨まれる覚えはないぞ……」

「お風呂の件と一緒に……」

「風呂のこと、永久にチャラにならないのかよ……」

「エイジ、スープが冷めるわよ。それに行儀が悪いし」

夕食中もエイジは書類に目を通してている。

ものはこれまでの戦況報告書だ。

どのように戦い、どのように負けたかがはっきり書いてある。

機密情報なので、潤色も取り繕いも少ない。

「国の命運よりスープの価値のほうが高いなら飲むさ」

「もう！勝手にしてなさい」

といっても、エイジを無視できる騎士はいなかった。

昨日来たばかりの傭兵ようへいが、リックに事実上「勝利」して——過去の自分たちの戦歴に目を通してているのだ。無視できるわけがない。雑談をしている者もいるが、心なしか声が小

さい。

すでにそれぞれのデッキレシピはエイジに提出されていた。エイジを目の敵にしていたトウールですら出しているほどだ。

半分は期待のせい。

この異世界の傭兵ならなんとかしてくれるのではないか。

半分は畏怖おそのせい。

この傭兵の価値観は自分たちとはどこが違う。

食卓に書類を持ちこんだのは、エイジの側も確信犯だ。こんなことをして、能率が大幅に上がるわけでもない。

騎士たちがエイジから意識を外しきれないまま、談笑していたその時——

「みんな、聞いてくれ」

エイジが席を立った。

当然、全員の視線が集まる。

（俺、あんまり協調性ないんだけどな。けど、こうでもしないと——）
勝てない。

これは戦争だ。一人だけが抜きんでも勝ち残れない。

だから、素晴らしいアイデアとともに、そのアイデアに従わせる力量が必要になる。

相手を従わせるには単純な力だけでは足りない。何よりもまず自分を信じさせられる環境を用意せねばならない。全員の顔をゆつくりと見回してから、エイジは口を開く。

「この国を今から強国へと変える」

声はないが、いくつか戸惑いのような表情が垣間見えた。

「そのためには、みんなの協力が必要だ。デッキは昼に見させてもらった。何人かはデッキのほうも少し改造させてほしい。差し出がましいかもしれないが——」

「貴様、いいかげんにしろよ！」

そこでもう一人、立ち上がる騎士があった。

青年騎士のトゥールだ。

「お前の実力が高いのは……午前のリッカとの練習で見た。だが、入ったばかりの、それも傭兵風情に口出しされる覚えはない！ 曲がりなりにも僕たちは騎士だ！」

案の定、トゥールが来たかとエイジは思う。

彼が強情なのではない。むしろ、彼は全体の安全弁だ。新入りにいいようにやられて、気に入らない——そんな人間なら誰でも持つ感情を代表して述べているだけだ。

むしろ、ほかの騎士が友好的でいられたのは、内心の一部をトゥールが言ってくれていだからじゃないかとすら思う。

「あのな、これは俺のために言ってるんじゃないんだ」

トゥールの目に穏やかな視線を向ける。敵意に対して敵意を返すのは三流だ。

「もっとも、みんなのために言ってるわけでもないけどな」

そこで、おどけたように、息を吐く。

「貴様！ どういうことだ！」

「決まってるだろ。これは——」

騎士は貴族階級なのだという。

仙人は霞を食べ生きてるが、貴族は誇りで生きる。

自分たちの特権と威信を担保するだけの価値観が必要だからだ。

その誇りをくすくすする。

「これは——この国を守るための話だ」

再度、周囲に目をやる。

トゥールも反論の言葉が出ないらしい。

これでうかつなことを言えば、私利私欲に負けて、国をないがしろにしたことになる。

「民衆が鍬や鎌を持って立ち上がれる時代は百年前に終わった。敵の魔札使に立ち向かえるのは、ここにいる騎士たちしかない。俺は傭兵だ。みんなのために誇りを貸すことはできない。けれど、知恵を貸すことはできる。そのために異世界から来たんだ」

語りかけるように、一つずつ丁寧に言葉を並べていく。

「やってくれるか？ 騎士の誇りにかけて」

「無論です！ 副官として了解しましたです！」

マユがすぐさま大きく手を挙げた。

副官の声呼び水になった。

ひげ面の大騎士、アンフェルスが「もちろんだ！」とジョッキを持ち上げて叫ぶ。

細身の女騎士、マイラも「このデッキ、預けるわ」とケースを差し出した。

立て続けに、俺も、私もとという声。

（作戦成功だな）

一対一で切り出していけば、同意しない者もいたかもしれない。少なくとも考える時間を与えてしまう。だが、全体の流れが改造ありきに動いていけば、そういうわけにもいかない。

最後に、リツカが、

「これでいいのよね」

ベルトからはずしたデッキケースを渡し、

「リツカが、渡すなら……」

と、トゥールもケースをテーブルに置いた。



「ありがとう、パステーションさん」

「だが、実戦での活躍を見るまではお前を認めたくわけではないから……」

トゥールの言葉にはうなずいて返す。相手に合わせて対応は変えていけばいい。

「はつきり言う。王国軍の力とみんなの力を見れば、この国の力のほうが強い。それでも負けていたのはちょっととしたボタンのかけ違いがあったせいだ」

意気が上がる。ひとまず、良い方向に船は動き出した。

もっとも、残された時間はそれほど多くない。

「あの……エイジさん、数日先にはまた王国軍が攻めてきそうなんです……間に合いますか……？」

マユが不安げな目で問いかけてくる。やっぱり、マユの意識は一步も二歩も先に向いている。

「間に合わせる。俺もそれまでにデッキを作る」

いくらなんでも、あんな余り物だけじゃ戦い続けられない。

「なあ、こういうカードが余り物の中に交じっていたんだが」

エイジは何枚かのカードをマユに見せる。

虎とらや狼おおかみが描かれている。その手の〈召喚霊〉は『ネオアルカディア』では〈大地の属性〉のカードだ。

〈大地の属性〉は〈召喚霊〉の強さに定評がある。しかし、それだけでデッキを作るには枚数が全然足りていない。

「ああ、それはたぶんドワーフさんの工房で作っているもので――」

マユが言い終わる前に――

「場所？」

エイジは口を開いていた。



まず、最初の工程は文章欄に緻密ちひまな文字で能力を記す作業。

これを専門の文字入れ職人が一枚ずつ行っていく。細い針のようなペンにインクをつけて、引ひつ搔かくように文字を「入れる」のだ。決して「書く」のではない。

文字入れ職人にはもう一つ仕事がある。適切な紙を選ぶことだ。これはこのあとの工程の職人にはない特権だ。

文字が無事に入れば、紙は絵入れ職人のもとに運ばれる。

ここで一枚ずつ内容に合った絵を入れる。印刷物ではないので、まったく同じ絵である必要はない。犬のカードであれば、犬とわかればそれでよい。ただし、大抵の場合は様式

に則^{のつと}ることにはなるが。

これで紙の部分——通称「表」の作業は完成だ。
 やっと作業は最後の裏作り職人のところに移る。

文字も絵も入った紙に一枚、一枚、なめし革を裏から張りつけていく。裏のデザインは国ごとに統一されている。違っていれば違法な商品になる。これが正しく張り合わせられれば、魔札使^{まじし}の使うカードが完成する。

——表面上は。

裏作り職人は必ずプレイテストを行う。

効果を発揮しない不良品が出れば、工房の名を貶^{おとし}める。無論、商売にも響く。

とくに新たな能力のカードを職人が自作した時は、それが効力を示すかどうかは試してみなければわからない。

たとえば、「敵の魔札使一人は永久に呪文^{じゅもん}が使えなくなる」などという文章を入れたところで、それは本番ではただの紙切れにしかない——可能性が極めて高い。

断定ができないのは、その根拠を人間が持たないからだ。

人間はカードを作ることではできない。

しかし、魔札使がその力を行使できるかは、「支配者」が決める。

その「支配者」を「神」と呼ぶ者も「魔」と呼ぶ者もいるが、人間にわかるのは何か超

越的なルールの管理人が存在していそうだとということ、強力すぎるカードがただの紙切れになってしまふということだけだ。

ゲームバランスが壊れない範囲で、いかに強いカードを作るか。そこが職人の腕の見せ所でもあるし、各国がしのぎを削る分野でもあった。

もっとも、すべての職人が国に直接奉仕しているわけではない。

ドワーフのその職人も、いわば「野良」のほうの一人だった。

工房で、丁寧になめし革を叩き、カードになじませる。その腕はセンタリカールの城下を拠点にしている連中にも負けない自信があった。魔札使からも信頼されている。

だが、その魔札使も「野良」の側だ。

リカール侯国^{まうこく}の騎士は〈精神の属性〉のカードしか使えない。地域によって魔札使の力は露骨な適性がある。魔札使であれば、どんなカードでも使えるとは限らない。少なくとも得手不得手はある。槍^{やぶ}の名人に短剣を持たせても活躍できるかわからないようなものだ。

それは職人の側も同じだ。山岳地帯出身のその職人も〈大地の属性〉のカードしか上手く作れない。結果、騎士団に入らない〈大地の属性〉の魔札使相手に商売をするしかない。寡黙な職人はわざわざ愚痴をこぼすことはない。

それでも、できることなら国同士の戦いという晴れの舞台上で自分のカードを使ってほしいと思うのが人情だ。

そんなドワーフの職人を訪ねる者があった。やけに若々しい声だ。「野良」の新入りだろうか。

けれど、相手の着ているものを見て、職人は飛び上がりそうになった。それは侯国の騎士のみが着用を許された衣装ではないのか。

「侯国軍の副官、マユ・ファンダイクです！こちらがドワーフで一番腕のいい職人さんとお聞きして、やってまいりました！」

冗談のような小娘が入ってきたが、侯国軍副官が少女という噂は聞いていた。將軍は侯女であるフィエナーレ姫が就いているから、事実上の大將だ。

「あっしは大地のカードしか作れませんぜ。精神のカードが要るあなた方には無用の場所じゃないですか？」

「いや、大地のカードでいいんだ」

横から少年が一人入ってきた。

その目を見て、職人はこっちが客かと直感的に悟った。

この男、騎士ではない。騎士団の服を着てはいるが、そんな折り目正しい出自ではない。もっと、のっぴきならない空気を出している。

「召喚に時間のかからない大地のカードで、できるだけ上等のやつを頼む。金は国から出るから相場の三倍は出せると思う。ああ、それじゃケチくさいか。侯国が戦争に勝てば、

歴史書におっちゃんの名前を載せてやるよ」

「お前さん、傭兵だ。しかも傭兵団でもなく、一匹狼の傭兵だ」

「傭兵っていうのは大当たりだな。これでも高等教育は受けてきたんだけど」

これから、侯国軍の中で戦うと少年は言った。

大法螺吹きは何人も見てきたが、そんなわかりやすい法螺を吹く男に出会ったことはついぞなかった。

「おっちゃん、やってくれるか」

「期日は？枚数次第では数日かかるぞ」

「期日は戦争に間に合うまでだ。だったら侵略者側に聞いてもらったほうがいいな」職人は儀礼的に顔をしかめたが、その美、ふてぶてしい輩と仕事をやるほうが性に合っていることもわかっていた。「野良」には「野良」なりの生き方がある。

「情勢からしてぎりぎりだ。相場の三倍の金が出るなら、ほかの仕事を止めてでもやってやるけどよ」

「任せた。それとも傭兵の頼みだと信用できないか？」

「その制服に免じて信じてやる」

◇
◇
◇

発注が無事に終わると、ドワーフの工房近くの宿に入った。

「悪いな。ついてきてもらって」

部屋に入るなり、エイジは荷物をベッドに放り出して、腰を下ろす。

慣れない馬車の旅で肩がこっていたし、背中も痛い。知らない間にどこかにぶつけたのだろうか。

昨晩は各人のデッキに改良の意見をつけて、明け方にはマユと一緒に出発していた。仮眠は馬車の中どころかとうた。

「これも勝つためなのです。それに、エイジさんに迷われたら大変です」

エイジが求める工房は、馬車で二日かかるドワーフの集落にあるという話だった。土地勘もないし、勝手もわからないエイジ一人で目的を成すのは難しい。そこで副官のマユがついてきてくれたのだ。

「たしかに、宿泊先をネット予約できるわけでもないしな……」

かつてのヨーロッパでもそうだったはずだが、大きな街を除けば、この世界でも宿というものが明確にはない。今回は街道に近いので宿と名のる民家があったが、村中をまわって交渉する可能性だってありえた。

そのあたりの手配は、マユがごとごとくやってくれていた。大人も驚く手際の上さだっ

た。

「マユ、お前はすごいよ。何かの手違いで日本のほうに飛ばされても、平気で働いて生きていけそうだ」

「マユはパン屋さんの娘ですから。お客さんとのやりとりはたくさん見えています」

「たしかに人に頭を下げた回数少ない貴族よりつぶしが利くな」

もちろん、プライドも人間の大事な構成要素だが、そのせいで自分を殺すこともある。

「あと、デッキ改造の鶴の一声も助かったよ」

「マユ、ほかのお店のためにサクラをやったこともありますからね。こう見えても海千^{うみせんやま}山千^{せん}ですよ」

などと言って、飴玉^{あめたま}を口に運ぶ。

すぐさま、マユがエイジにデッキを差し出したのは——芝居だった。

副官が言い出した以上、ほかの人間は渋りづらい空気が出る。

(これは世の中のためになるウソだからいいよな)

「ところで、職人さんにあんな弱そうなカードばかり注文してよかったですか?」

エイジが頼んだのは大半が小ぶりの〈召喚霊〉だ。

騎士団が使っている精霊のような中型・大型のものと比べると頼りなく見える。

「見た目は弱そうかもな。でも、あれでいいんだ」

〈精神の属性〉のカードも使えることは特訓で確認した。けれど、慣れないものを使う必要はない。

（フォーターンキルに近いデッキを一から作る）

疲れた体で、持ってきた戦況報告書を開く。まだ細かなところまで目は通せていない。

（王国側は、〈加護の属性〉か。軽量の兵士が主力だな）

〈加護の属性〉は自軍を強化する呪文が多い。中盤以降も〈召喚霊〉を強化することで対等に立ち向かってきている。

あとは序盤の貯金を持っていて敵軍が競り勝つという構図だ。

（次の会戦までに間に合うかどうか、運命の分かれ道だな）

報告書の束の横に飴玉が転がってきた。

「疲れている時は、甘いものなのです」

顔を上げるとマユが笑っていた。まんまるい笑みとでも言うような笑い方だ。

「ありがたくもらっとくよ。この国は本当にいい指揮官がいる」

ある意味、マユの生き方はエイジの理想だ。

もし、マユが日本に生まれていても小学生だか中学生だかの枠組みにはめられて、何もできなかったはずだ。それが、この世界なら第一線で働いている。

「俺も、傭兵を卒業して、もっと上にいかないと。まずは騎士に叙任じよんされなきゃ」

「エイジさん、本当に勉強熱心ですね」

「こうやって、生きたほうが面白いだろ。それに負けられない相手がいるんだ」

「というと、元の世界の人ですか？」

「ああ、芹香せりかっていう、日本に来てた魔札使マジシだよ」

マユはびっくりしたように口を押さえた。

「この世界に來ないかって最初にスカウトしてきたのも、その人だ。同じ学校の学生にまぎれてたんだよ。偉大なる偶然だ。ちなみに一回戦って負けた」

「だから、その人に勝ちたいってことなんですわ」

頭に浮かぶ芹香は楽しげに笑っている。

その表情を悔しげなものに変えられるのは自分だけだ、そうエイジは思う。

「勝ちたい。けど、まだ無理だ。もっと多くのことを学ばないと」

「なんだか、エイジさんて、リッカさんに似てますわ」

「……え？」

変な声が出てしまった。

ありえないという言葉を十乗ぐらいしてもまだ足りない気がする。

「リッカとどのへんが似てるんだ……？ 同じようなところにほくろでもあるのか？」

「いえ、違いますよ。ちなみにリッカさんは胸にほくろがあります」

「情報は多いほうがいいが、それはいらぬ情報だな……」
もし言ったら、どうして知ってるんだと雷が落ちる。

「似てるのは、勉強熱心なことです」

「へえ……。人は見かけによらないな」

「そんなことないですよ」

飴玉を放り投げたマユは、口で上手く受け止める。百発百中だ。

「〈固有存在〉のサーラウネさんは見ましたよね」

「どっちかというところ、見るのに困る格好だったけど」

「〈固有存在〉は普通、人間なんて相手にしません。どこかずば抜けているところがないと、ダメなのです。リツカさんの場合は——」

「熱心さってことか」

こつくりと、マユは「です！」とうなずいた。

（俺にできるのは、あいつを開花させられる場を提供することだな）

「きつと、戻った時には、リツカさん、変わってると思いますよ。変わるための種はエイジさんがまきましたから」

「期待しとくよ。ほんとにな」

勝つためには不要な人材などいない。

まして、強くなろうという意識があるなら、それほどありがたいことはない。

「ところで、疑問に思ってたんですが、エイジさんはどこでそんなカードの腕を磨いていたんですか？」

マユがそう思うのも当然だ。カードがあらゆる世界に存在するとは思えないだろう。この世界だって、カードはまだ百年の歴史しかないのだ。

「さっき言った芹香って魔札使がな——」

まだ芹香との「出会い」から日も浅いのに、何年も前のことに感じる。

確かめるように、エイジはマユに語る。

——芹香が『ネオアルカディア』というゲームを作ったこと。

——芹香にスカウトされたこと。

長くなりそうな気がしたが、そんなことはなかった。

（俺が先輩について知ってることなんて、その程度なんだよな）

もっと芹香のことを知りたいという気持ちは確かにある。どことなく恋に似ている気がするが、やっぱり恋とは本質的に違う気がする。甘い部分がなさすぎる。

「マユはその魔札使の名前、聞いたことあるか？」

「いえ。初耳なのです。けど、引っかけますね……」

マユはどこか浮かない顔をしている。頬は飴のせいか、ふくらんだり、しぼんだりして

いたが、表情までは変わらない。

「その話の通りだと、明らかに不可能な部分があるんですよ」

「不可能……？」

「あつ、気にするほどのことじゃないですよ」

ふるふるとマユは首を振った。

「それじゃ、マユは今からお風呂に入ります」

マユがちよつと不安そうにエイジを見た。

「のぞかないで下さいね？」

「絶対にのぞかないから心配するな」

「で、ですが、エイジさんは魅力的な人ならのぞくんですよね？」

「だから、のぞかないって」

本当にエイジはのぞかなかつた。

なお、その日、マユは日記帳にこんなことを書いた。

六月十七日 晴れ

エイジマンはお風呂をのぞきませんでした。興味も何もなまそうでした。男ばかりの軍隊だど、男同士の恋愛は目覚める人が多いと聞きますが、エイジマンもそうなのでしょ

う。か。マユがお風呂に入っているのは無視だどか、それぐらいしか考えられません。リッカマンが心配してたので、戻つたら報告しておきましょう。

ドワーフの民族料理のお菓子が売られていたので、たくさん買ってきました。小麦粉を油であげ充ものぞきそうです。甘みひかえめなので。

◇ ◇ ◇

エイジが首都セントリカールを発つてから、騎士団の空気は張りつめていた。

何人かの騎士のデッキに、エイジが改造を求めたせいもある。

だが、主要な原因は外から来た。

——サクラッド王国軍が再び侵攻を開始したとの報が届いた。

王国側も決して一枚岩ではない。半島の先端部で魔札使の反乱が続いていた。それだけでなく、北部でも火種がくすぶっている。

そんな内部の矛盾から目をそらせるための侯国併合作戦だつたと言っている。

しかし、戦争には相応のリスクも伴う。侯国併合が失敗すれば、一気に不平分子が活気づきかねない。

だからこそ、王国側も必死である。今までは勝利こそすれ、局地的な争いで進撃は限ら

れていた。それが侯国首都のセントリカールも視野に入れた動きをはじめていた。副官であるマユもエイジもないが、待てる猶予は限られている。

——そして、王国侵攻の報から三日。

(エイジのやつ、早くしなさいよ)

もう、今日の夜には出発しないとイケないのに。

デッキの調整を続けながら、リツカはちらちら窓から外を見る。カードのチェックも大詰めの時期なのに、頭が働かない。

(あれだけ偉そうなこと言つといて、間に合わないなんて許さないわよ)
変な奴だった。

謙虚なわけではないが、勝ったことを誇るわけでもない。

すべてが通過点だと言わんばかりに、結果を気にしない。

貴族の出自と騎士の才能とで、肩で風を切ってきた自分が余計に恥ずかしくなる。

絶対にこのまま負けたくない。

なのに、窓を見ても誰も戻ってこない。太陽がそ知らぬ顔で鎮座しているだけだ。

「あいつ、実戦が怖くなつて逃げたんじゃないでしょうね……」

「やっぱ、彼のこと、気になるのね」

大精霊サーラウネが笑いかけてくる。

前回呼び出されてから、ずっと漂っているのだ。戦闘に参加する際は再度召喚しないとイケないが、この世界に居座るのは精霊の意志なので、術者の負担にはならない。

「へ、変な意味じゃないからね……。頭数が足りないのはまずいし……」

「わかってるわよ。お風呂の仕返しもどこかでしないとイケないしね」

「そうね……。しっかり報復してやるわ。だから、早く戻ってきなさいよ！」

もう、調整はまったく手につかない。やればやるほど、バランスが崩れていくような気さえる。

前回、エイジがデッキを見せてくれと言った日——

リツカのデッキをエイジは一枚も変更しようとはしなかった。

もちろん理由は何も聞いていない。

でも、リツカは怖い。

これが「どうせ何を言っても無駄だから」というものだったら……。

「絶対リベンジしてやるからね！ ザルスホスト家の威信にかけて！」

すでに、將軍である侯女フィエナールの下で軍団編制は行われてしまっている。

エイジはまだ扱い上、リツカの配下にいる傭兵だ。幸い、配置もリツカが決められる立場にある。だが、出発まであと何時間も無い。その時に戻っていなければどうすることもできない。

「もう、いいわ。エイジの分までわたしが頑張ればそれでいい」
最後にダメ元で窓の外を見る。

ほら、どうせいな———いた。

リカール侯の紋章をつけた馬車が戻ってきた。

リツカはカギもかけずに部屋を飛び出る。

エントランスにエイジとマユが入ってくるのが同時だった。

「はつきり言ってギリギリよ」

「悪い、悪い。職人のおっちゃんが頑固でな、いいカード作るためにギリギリまで粘られたんだよ」

不敵にエイジは笑う。

これまでの自信が確信に変わったとでもいうような顔。

「逃げたかと思った……バカ……」

心配させられたことを責めたい気持ちと、戻ってきたことを祝したい気持ちが混ざり合う。どっちが大きいのか、リツカにもよくわからない。でも、うれしいのは間違いない。

「逃げるわけないだろ」

「信じていいのね？」

「俺はこの国を救うために、ここに来たんだ」



最後まで立ち読みしてくれて
どうもありがとう！
続きは本で楽しんでね！